ただ思うがままに

zakku

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

能力も電波だが、性格も電波。

そんな兄妹がガルパン世界でやりたいようにするだけ。

息抜き作品なので、更新速度は不明。試験的な事をいろいろ試しています。リメイク前提の作品かもです。

日記形式と主観での話と色々入り乱れる予定。みほ達が高校に入学するまでスピーディにやる予定。

注意　妹が覚醒するのは大分後です。

世界観から構築していくので、キャラが多く出るのは少し先になります。後、兄と妹が主人公です。世界観の構築の後はほとんどが妹視点になります。

それに加え、兄は完全にみほたち世代よりも年上なので原作キャラにそこまで関わりません。

旧題　黒森峰の電波兄妹

目次

start　兄の日記
小学生時代の日記 ―― 1
中学生時代の日記 ―― 11
中学時代の日記　その2 ―― 22
他人視点 ―― 31
高校生時代の日記 ―― 38
Shift　妹視点
私はいつでも自由気まま ―― 48
電波少女とファーストコンタクト ―― 53
電波少女と他二人 ―― 57
電波少女と夏休み前 ―― 63
電波少女は堕ちていく ―― 68
電波少女と決定打 ―― 78
電波少女とお見舞い ―― 87
電波少女と残酷な壁 ―― 92

ｓｔａｒｔ　兄の日記

小学生時代の日記

○月○日

今日から俺は日記を書くことにする。

なんでも最近同級生の間で流行っているらしい。

流行りになかなか乗れない俺を心配してどこからか情報を仕入れてきた母さんによって書かされることになったのだ。

そんな、交換日記ならまだしも普通の日記なんて小学生の間ならすぐに過ぎ去る流行りだろうに…

そもそも母さんは心配症なうえに息子好き好き過ぎてウザイ。

母さんの事はママと呼ばないとまず拗ねる。拗ねまくって口も聞いてくれない事がある。父さんはそれぐらい呼んでやりなさいと言い、役に立たないし、可愛い妹は未だママ呼びだからママと呼ぶことに羞恥心も違和感も覚えていないので味方にはならないし…

ああもう！周りは誰もママなんて呼んでないからママ呼びは恥ずかしいんだよ!!なんて言ったら泣き出すからママ呼びからは卒業できないし！

ああ、なんでこうなるの？

★月○日

今日は妹の小学校の入学式だ。

妹は小学一年生、俺は小学三年生になる。

妹の可愛い制服姿に家の大人共は大騒ぎだ。婆ちゃんや母さんが写真を滅茶苦茶とりまくるとりまくる。

おかげで何時間も着せ替え人形状態だった妹が母親たちから解放されたと同時に泣きついてきた。

可愛い妹を泣かせるとは許せん！母さん！程々にしろ!!

△月★日

妹が入学してから最早三ヶ月が過ぎた。

どうやら妹は戦車道に興味を持ち始めたらしい。
個人的には危なかっしそうでしないで欲しいのだが、妹は小一にして戦車を前にキラキラとした目をしている。
戦車道がいくら女子のスポーツだとは言え、あまり妹が戦車に乗る姿は想像できない。
□月△日
明日、自衛隊の駐屯地創立記念行事を見に行くことになった。妹がどうしても行きたい！戦車見たい！と言い出したのだ。
まあ、自分も嫌いじゃないし、戦車以外にも色々あるらしいから楽しめるとは思う。
というか、自衛隊の作るご飯に興味がある。カレーが美味しいのは海自だったっけ？陸自だったっけ？
□月□日
駐屯地創立記念行事に行ってきた。まあ、なんというか、うん、まあ、控えめに言って良かったよ。スゲー良かった。まさかあんなに、心浮き立つとは思わなかったよ。
徒歩部隊の行進も、車両も航空機も戦車も音楽隊さえもその行進には隅から隅まで洗礼されたものがあって、魅入ってしまった。
行進曲「大空」が音楽隊によって吹かれるなか、春が少し過ぎたくらいのはずなのに爛々と輝く太陽に照らされながらも悠然と進む自衛隊。楽器も銃器も武装車両も戦車も、日光を鈍く反射しながら行進する姿はカッコイイとしか言うことができなかった。
特に戦車、妹が夢中になるのも頷ける。あんなロマンが詰まった物を好きにならない筈なんてないんじゃないだろうか？
よし、決めた。俺、戦車道する！
△月△日
自衛隊ですか、男子が戦車触るのならやっぱり自衛隊への入隊の方がイイですかぁ。えー、でもなー、やっぱりすぐに戦車触りたいしなぁ、それならやっぱり戦車道で整備士するのが一番イイと思うんだけどなー。偏見はイイでしょうよ、時代はそろそろ戦車道に男が関わっても十分イイと思うんですけど？

母さんは元戦車道の競技者だから許してくれたけどなかなか父さんが折れてくれない。

え？親子で一緒にサッカーしたかった？息子がサッカーチームに入って応援しに行ったり教えてあげたりするのが夢だった？いやイイじゃん、戦車道だって立派なスポーツですよー、父さん。

陸自志望ならまだサッカーチームに入らせられる希望があるからってそんなに必死になんないでよ。

ちょっと、説得頑張んなきゃいけないようです。

€月〆日

戦車道のジュニアチームに入りました、妹と一緒に。親父の説得は二週間にも及ぶ程ごねにごねまくりなんとか戦車道をさせて貰えるよう説得した。大丈夫だって父さん、遊びでなら時々サッカーぐらい付き合うからさ。

どうやら、小学生にも戦車道を教えているところはあるようで、自分のいる県にはそれなりの大きさの陸自の駐屯地（創立記念行事みたところ）があるのでそこで練習するみたい。

俺はそこで整備を学ぶ事になった。

ただ、競技者とは違ってすぐには戦車に触れる訳では無いらしい。妹などは大人の指導者と一緒に実際に戦車に乗っているが俺は戦車の前ではなくボードの前で整備の基本を教えらている。

まあ、イイ。さっさと覚えてさっさと認められて戦車をナデナデするぜ!!

＃月＃日

戦車道チームに入ってから三ヶ月程経過した。その間戦車道の練習、帰ってきて飯とか食ってたりしたらすぐに疲労で寝る、というサイクルが定着しつつある。友達と遊ぶ日があっても疲れというのは溜まっているもので宿題してご飯や風呂入ってなどしていたらすぐに眠くなる。学校の日記もあるっていうのに個人的な日記も書く暇なんてなかった。

さて、戦車の整備についてだが、最初は戦車の整備でなくオン

ボロ車両の整備から始まった。なんでも、小学生にいきなり戦車の整備は無理だということらしい。まずは、自転車やバイクなどから基本始めるらしいが、俺は小3でそれなりに体力も熱意もあることから車からの整備を許された。

しかし、すぐに失敗してしまった、部品を上手くつけられなかった。小さい体じゃ車すら上手く整備できぃ。

そのせいで自転車整備からになってしまった。自転車…、普段から使うしこういうのもイイ経験だろう。

＃月＋日

あれからまた更に三ヶ月経った。進歩は今のところ大ありだ。

冬の間の整備はかなりキツかったが、自転車、バイク、そしてリタイアさせられた車にまた再挑戦中だ。

あれから少しは身長も伸びた。力もついた。子供の成長は目覚しい、特に男子なんかは、男子3日あわざれば刮目して見よというしな。

年内に合格点をコーチから貰えるようにしたい。

☆月＃日

貰えた！コーチからなんとか年内に認めて貰ったよ！この年で凄いってメチャクチャ褒めてもらえたよ！さあ、コーチ！次は、次こそは！戦車を！戦車を僕に触らせてください！

え？次は武装車両だって？

○月☆日

コーチに合格点を貰ってから二ヶ月経った。俺も進学して小学４年生になった。

別に不貞腐れて日記を書いていなかった訳ではない…、イヤ不貞腐れていました。

ただ、戦車を整備している現場を自由に見学することは大人の同伴が必要だが許可を貰えた。明日早速見に行かせてもらおう。

○月@日
凄かった。
戦車の整備ってやっぱり体力いるだなって思った。部品を交換するだけでもだいぶデカイ部品を持ち運びしていた。
何というか、確かにこれは小学生に任してイイものではないと実感した。けど、コーチ曰く武装車両の整備をできるだけでもかなり凄い方らしい。それに戦車道では旧式の戦車が殆どだから今の整備性まで考え抜かれている戦車と比べたらまた難度が増すらしい。
けど、整備している中いろんな部品や中身、キャタピラなどを見せて貰ったり触らせて貰ったりした。
これだけでも見学に来れて良かったと思う。
#月@日
妹が泣きついて来た。どうも最近戦車道で行き詰まっているらしい。何でも、戦車を一人で操縦するにはある種の資格が必要らしく、小学生用の資格を取るため勉強しなければいけないらしい。
それがなかなか進まなくて困っている
よし！イイだろう！にいちゃんが一肌脱いでやろう！
ということで、資格の勉強を妹とする事になりました。
○??月△日
今日コーチに妹と資格の勉強をしていると話したら、お前もそういうの取った方が良いかと、小学生用の資格を何個か取ることになった。整備や戦車を動かす為の大型車の資格などの勉強のする事になった。けど、戦車道促進の為に作られた小学生用の資格なので難しいが合格できない難度では全くないという。
まあ、小学2年生の妹が資格の勉強をしているんだ。俺もできるだろう。
@月@日
今日航空自衛隊の航空祭に行って来た、その前日は陸自の駐屯地創立記念行事だったけど。
小学生のジュニアチームのコーチなどは元々戦車道をしていた現役の自衛隊員が多いらしく、自衛隊の大事な行事がある日は基本

的に練習はお休みになる。
なので二日間お休みになった子供たちに合わせて両親も休みを取り、ここら辺では有名な航空祭にやって来たわけだ。大空の中をブルーインパルスが飛び交う姿は華麗で、戦車とはまた違う魅力があり、あれを整備できる人達がとても羨ましくなった。
後、新しい友達ができた。妹と同じ年齢ではあるがその子も妹と同じく戦車に魅せられている子だった。ただ、両親二人共日本人だというのにその子は銀髪で目の色は緑と青の中間のような色で本当に日本人の子供かと疑うような子供だった。なんというか、この子が生まれた時この子の家庭は修羅場になったんじゃないだろうか？具体的にはこの子の母親が外人と不倫したんじゃないかって疑われたんじゃないだろうか？ただ、この子の家庭はそれなりに上手く言っているようなので解決していることなのだろう。
だが、残念な事にこの女の子は旅行でここまで来たらしくいつでも遊べる訳では無いらしい。来年もここで遊ぼうと約束してその子とバイバイした。
〇月^　^日
やっと、やっと長い資格試験の時間が終わった!!この何ヶ月かの間に戦車道小学生用の資格を何個も取る事になった。でも、この試験の為に戦車に乗る機会があったのがよかった。戦車に乗るというのは俺の目標の一つだったからだ。
これでこれからの戦車道が多少便利になるだろう。
？月？日
最近、変な夢を見る。
銃声が飛び交い、大砲の音がする。その大きな音で気づいたら戦車に乗っていて、そのまま戦車は走り出して敵を撃破していく。圧倒的な技術で敵戦車を倒していく。
どこの戦車かまでは分からなかったが。それに俺は俯瞰的に景色を見ている訳ではなく、乗組員の一人として乗っているような感覚で夢をみている。
それも毎回場所は変わるし、乗っている人も変わっているし、戦

車自体も変わっているようだ。
悪夢という訳では無いが、小学生には少々刺激が強い夢ではあると思う。
＆ａｍｐ；月＆ａｍｐ；日
武装車両の完璧な整備が最近できるようになった。というか、部品からの組み立てを何ヶ月か掛かるが一人でできるようになった。
嘘です。盛りました。
ただ、全てでは無いがそれなりの部分を一人で組み立てられるようになった。大人の補助はいるが、それでも大人と同じぐらい働けている。
この調子ならもっと大型の車両整備を経験すれば豆戦車なら整備できるだろうとお墨付きを貰った。
それと同時に、戦車の基本的な構造を小学生でも分かるように教えてくれる事になった。将来ちゃんと戦車整備できる為の土台は出来上がりつつある。
☆月@@日
今日でもう五年生！
この日記は頻繁には書かずに重大な事の時にしか書いていない。細かい日記は学校の日記で十分だ。
俺は身長もデカくなって体力もついて来た、大型の武装車両の点検や整備もできるようになってきた。これなら半年後には豆戦車の整備には入れるだろうとのお墨付きである。
それに、小学五年生から整備コンテストという物があるらしく、戦車道推進の一環で開かれる大会らしい。
残念ながら安全の為に戦車では無く小型の武装車両だが、全国からトッププクラスの子供達が集まるということだ。
競技人口的は女子の方が圧倒的に多いらしいが、それなら楽勝だろう、易々と女子に負ける俺ではない。俺は勝ち残って見せるぜ！
後、妹は卓上演習や砲撃の大会で随分と凄い記録を残している。妹は将来凄い大物になるかもしれん。
@月^__^日

今年の航空祭でも銀髪のあの子に会うことができた。
あっち側も俺たちの事を覚えてくれていたらしく、航空祭の始めから合流して子供だけではしゃぎまくった。
ブルーインパルスを見てはしゃいだり、美味いものを食べてはしゃいだり、楽しく時間を過ごした。
彼女は妹よりも俺の方に懐いているみたいで、まるで俺を自分の兄のように扱っていた。まあ、悪い気はしないのでいいのだが。
ちょっ妹！兄は凄いだろ自慢は止めてください恥ずかしい。それも無いことないことの尾ひれつきまくりの噂じゃないですかやだー。
ええい、もう、楽しそうだしいっか!!
また来年も会えると良いなぁ。
Ａ月ａ日
やって参りました。豆戦車整備のお時間です！
この時のために随分と苦しい時間を送ってきたんだ。
ふっふっふっ、覚悟しろよぉ～。九二式重装甲車!!
ＷＡＴＳ月ｔａｎｋ日
なんだよ！難しいじゃねえか戦車整備。
やっぱり小学生の腕力じゃ、整備できても信頼性が上がらない！
どこかに絶対不調が出る!!
小学生の腕力ではどうしても馬力が足りないから時間も凄く食うし良いことないよー。
そんなせいで最近アニメをよく見るようになってきた。上手くいかない事があったらよくアニメを見て忘れるようにしている。
だって、技術的な失敗だったら反省して次に活かせるけど、そもそもの原因が年齢と身体的なものだから直し用が無いもの!!
腕はまだ短いし、大した力も出ない。かといって小さい頃からの過度な筋トレもよくないらしく打つ手なし。
コツコツ毎日、地道にやっていくしかないようだ。
わーん！助けて！ドラ○もん!?
●月○日

という訳で、ほんの少しの進展しかないまま小学六年生でーす。
妹は砲撃の大会で準優勝を撮りました。小3にして小6達を蹴散らしていきました。兄は驚愕で顎が元の位置に戻りそうにありません。
けど、俺だって整備の大会で全国3位にまでなった。
ただ、やっぱり一位二位にはなれなかった。この頃の男女の成長は女子の方が早い傾向があり身長などが男子よりも大きい子が多いのだ。だから、3位の理由も身体的な理由である。
だが、今年こそは一位をもぎ取ってやる。あんな男子のプライドをけちょんけちょんにされたのは初めてだからな！リベンジを成し遂げるぞ!!
＆ａｍｐ；月Ａ日
ヤバイ、俺、エスパーかもしれん。なんというか最近、あの妙な夢が最近前よりも更にハッキリしてきて、感じる感覚もどんどんリアルなものになってきて、それぐらいから現実にも影響が出てきた。
豆戦車を整備している時、どこができていないか、どこが悪いのか、なんとか無くだが動かす前から、一目見ただけで分かるようになってきた。コーチとかはまだ分かっていないのに、俺はどこを整備すれば良いのか直感でわかるようになってきた。
もしかしてこれが、ニュータイプってやつなのか…
（＊^ ○^ ＊）月（＊^ ○^ ＊）日
今日、やっとのことで、豆戦車を完璧な状態に整備する事ができた。やっぱりこれも小学生じゃできないところをサポートしてもらう必要があるが、小学生じゃありえないほどの整備能力だという。
このまま順調に力をつけていけば整備士として一生職には困らないだろうとも言われた。
あれ？俺知らぬ間に、手に職つけちゃったの？
（^ ^）月（^ ν^）日
小学生最後の航空祭だ。
そしてまた来てくれた銀髪のあの子。実はこんな関係なのにまだお互い名前すら知らない。

ただ、今回はあちらはこちらの名前を知っている状態だった。
なんでも、妹も俺も大会で結果を残していることでそれなりに名前が知れ渡っているらしく、彼女の住んでいる方でも戦車道関係者にはそれなりに有名らしい。
へえ、知らなかったなぁ。
ただ、あちらだけこちらの名前を知っているというのも不公平なので彼女の名前も教えて貰った。
名前は逸見エリカというらしく、エリカという名前はなんとも彼女らしい名前で、とってもいい名前だなとついつい褒めてしまった。
彼女も少し照れながらもそうでしょうそうでしょうと何度も頷いていた。
それからはまた彼女と一日中遊んでバイバイした。俺は多分中学生になってもここに来るだろうから、また会えると良いなぁ。
×月◁日
整備コンテスト、全国一位とりましたー、やったー！リベンジを果たしたぜー！フューー!!
やっぱり体格って凄く必要な要素ですねー、妹は砲撃大会でまた準優勝を取った。泣くな泣くな、小６も参加する大会で小４のお前が準優勝なんて滅茶苦茶凄いんだから誇れよ。大丈夫、お前は凄いと兄が保証してやろう。実際、俺の驚愕で開かれた顎は戻りそうにないのだから。
◁月▽日
な、なんと！このタイミングで軽戦車を整備させてくれる事になった！豆戦車からほんの少し大きくなったぐらいだがそれが整備できるのはとても嬉しい！コーチとかも本当は中学生になるまで整備させる気は無かったらしいが、豆戦車を完璧に整備できたから大丈夫だろうと急遽整備用の軽戦車を取り寄せてくれたのだ！
さて、これは本当は卒業祝いになるはずだったのだが、今から早速整備できるんだ、盛大に整備しようじゃありませんか！

中学生時代の日記

B月B日

いやっほー、中学生になりました。

中学生になって一番最初に訪れる一番大変な事を知っているかい？

そう、写真撮影だよ。カッツォ!!

わざわざ写真屋さんの予約取らなくても良くない？入学式でも散々撮るんだろ？家でも婆ちゃん達に着せ替え人形みたいにされるんだろ？

なら、こんな本格的なの別にいいじゃない!!

え？こういう記録は大事な物だって？でもあんたそれで娘泣かしてたじゃないか？程々ならばいいもののママは度々行き過ぎるんだよ。

え？でも俺に拒否権はない？満足するまで撮られるしか選択肢はない？拒否し続けるなら戦車道辞めさせる？

勘弁してくださいマッマ。そんな大人の権力振り回すのはズルいです。

◁月▼日

地獄の写真撮影を乗り越え、癒しの軽戦車の整備になんとかやってきた。

半年程この九八式軽戦車を整備してきたがかなりいい感じの戦車だ。整備する時にやりたいように整備できる。

俺が多くの経験を積んだことや体格が大きくなったのもあるかもしれないが、この戦車俺のやりたい事に応えてくれる。まるでこの九八式と会話をしているようにこいつの整備するべきところが分かる。

不思議な感覚だが、この戦車に対する直感のようなものがとても整備に役立っている。未熟な身では埋められない部分を埋めてくれる。夢がこれ以上ハッキリして死ぬ瞬間なんか体験するのは嫌だが同時に何処か期待している部分もある。これからどうなるかはその

時にならなければ分からない。まぁ、けど、どうにかなるっしょっ！

◁月→日

えー、嬉しい事に戦車の整備以外にも、戦車のカスタマイズやチューンナップについて教えて貰える事になりました。

やったぜ。

魔改造は男のロマンですからな。

それに、今まで周り道してきた経験がそれなりに活きるらしく、今までよりもカスタマイズを習得するのに時間はかからないと言われた。新しく学ばなければいけないところも多いらしいが、小学生の時に乗り越えてきた壁よりも高さはないだろう。

よおし、頑張るぞぉ!!

J月▼日

夏の！整備大会！

中学生になってからは大会内容も細分化されているらしく、戦車整備の大会は中3から、特例で中2からしい。

ただ、中学からは普通の武装車両の整備部門に出場できるらしく、中1でも大型の武装車両の整備部門なんかにも出場できるらしかった。

しかし、大型の武装車両の方はチーム戦が基本らしく個人戦は無かった。

自分は男子一人だけなので個人戦で出れる武装車両の整備部門で出場した。

結果は準優勝でしたぁ～！残念！決勝戦の相手は別に戦車道関係者ではなく将来普通に車関係の整備や設計の仕事に就きたい車大好きな中3女子であった。いやぁ～、好きな事をしている子は強いねぇ。俺は最近九八式に構ってばっかりであんまり車両整備はしていなかったからな。鈍っていたようだ。

次に妹の大会結果なのだが、砲撃の全国大会でヤツはとうとう優勝の座をもぎ取った。小5になって初めて優勝のトロフィーをゲットできたのだ。すげぇよ、俺の妹すげぇよ。

その日の夕食は豪華にしゃぶしゃぶだった。うちは焼肉より

しゃぶしゃぶ派なのだ。

★月B日

航空祭の日、もとい年に一度だけ会えるエリカとの約束の日です。

約束って？そんなの来年もまた遊ぼうしかないでしょ。

今年も子供だけではしゃいで無邪気に遊んだ。色んな乗り物を間近で見て、驚いて、親切な自衛隊員の説明に目を輝かせたり、美味しいご飯をみんなで食べたり、大空を羽ばたくブルーインパルスを見たりした。そうやって過ごしているとやっぱりあっと言う間に帰る時間が来ちゃって、恒例になっている来年もまたここで遊ぼうという約束を交わす。エリカは別れ際名残惜しそうにこちらに手を振りながら帰っていった。俺たちも名残惜しいけど我慢して手を振り返した。

来年もまた会えると良いなぁ。

□月??日

チューンナップやカスタマイズの勉強が粗方終わりました。冬に突入しています。雪が随分と降っています。自転車で移動できなくて、移動手段がだいぶ少なくなってしまいます。

それらは良いとして、これから本格的な実践に入っていきます。学んだ事をこの九八式に試しながら試行錯誤する日々がやってきます。未だに競技者の乗る戦車を整備できてはいないけど、いつか来る競技者が乗る戦車のため、その戦車に乗る人の為に最高の技術を習得したい。

□月◇日

え？母さん、なんて言ったの？

×月●日

今年の三月をもって今いるチームを辞めなくてはいけなくなった。

両親の仕事の都合上引っ越さなければいけなくなったのだ。

正直言って辛い。コーチとかは長年俺の面倒を見てくれて、ずっと戦車についての情熱を交わし合ってきたのだ。俺は遠くに行って

しまうけど、コーチとの日々は絶対に忘れないようにしよう。コーチが教えてくれた事は絶対に忘れちゃならない。

コーチも残された期間で教えられる事全てを教えてくれると言ってくれた。なら俺はそれに全力で応えるまでだ。

残された時間は少ないけど、頑張るぞい！

ｕ月ｔｅｓｔ日

とうとう引越しの日がやって来た。

見送りには俺のコーチや妹が世話になった自衛隊員の人も駆けつけてくれた。俺や妹には特に一生懸命になって指導してくれていたから、別れるのは俺も妹もコーチ達も凄く悲しい。

けど、行かなくちゃいけないんだ。

ありがと、コーチ。ありがとう、みんな。また手紙だったり年賀状だったり出すから、俺と妹を忘れないでくれよ、俺も貴方達を絶対に忘れないから。

ｔａｎｋ月ｔａｎｋ日

やって来ました、熊本県！

俺はどうやら黒森峰学園の中等部に編入することになるらしい。この学園は最近までは女学園だったらしいけど、この不景気と少子化の時代だ、ただでさえ運営が地上の学校より難しい学園艦という環境なのに女子限定なんてのは経営的に無理ということで共学になったらしい。そもそも女学校自体少なくなってきてるからな。

ただこの学校、戦車道においては超名門らしく、西住流という戦車道においての一流流派の影響を強く受けているらしい。が、俺は残念ながら西住流なんてものは知りません。流派がある事も知りませんでした。

だけど、俺はやりたいように自由にやらせていただきやす。流派なんて知りません。

あ！熊本に来たんだからク〇モンに会いたいなぁ。

ｂｌａｃｋ月ｗｈｉｔｅ日

俺は黒森峰学園の中等部戦車道に入部（入部？でいいのか）しました。

そしてやはり恐れていた事が起きました。黒森峰の整備士志望の生徒に男子が全くいない。先輩にも後輩にもなかなかいない。

それに俺は編入生だから他の生徒と仲が良い訳ではないから戦車道やろなんて言い出せない。でも勇気を出して、数少ない男子の何人かに実際に声をかけてみたが丁重にお断りされました。分かってるよ、戦車道は乙女のやる物なんだろ。男子にやるもんじゃないんだろ？そう言いたいんだろ？なら良いよ別に、男のロマンも理解できぬまま死んでいけばいい。

ｌｅｔ，ｓ月ａｎｄ日

エリカから聞いていた通り俺は戦車道をしている人の間ではそれなりに有名だと言うのは本当らしく、整備をしている生徒数名にマルマルさんですか？と何回か聞かれた。

まぁ、小学生の時には全国取った事もあるしぃ？中学一年の時には個人で出れる部門で全国２位にまでなったのだ。それなりに名前は知られているだろう。ただ、俺たち兄妹はそれなりに名を知られているがそれらは俺たちと同時に入学した一年生に掻き消されているらしい。

なんでも西住流本家の子供が入学して来たらしく、この黒森峰ではまるでお姫様のように扱われているらしい。

まぁ、お姫様かなんだか知らんが俺は整備士として最高の整備をやるだけだ。俺たち整備士は競技者の命を預かっているんだから。

が、中学生の間も未だに大人による最終点検は必須であり、時には先生が整備に参加する事もある。競技者に完全に任せるようになるのはどうやら高校生かららしい。

早く高校生になりたいなぁ。

ｂａｔ月ｂａｔ日

なーんで学園艦なんていう海の上で戦車の管理をしようと思ったんでしょうねぇ、偉い人達は!?

潮風がガンガン吹きまくる学園艦では、潮風から戦車を守る戦車倉庫を設置したり戦車自体にサビを付きにくくするコーティングがなされているとは言え、油断したら本当にすぐ錆びる。マジで一瞬で

何処かにサビがでる。
俺が持ち込んだ移動用の自転車なんか錆びて錆びてもうヤバイ。
陸での戦闘を前提に開発されている戦車と海とでは相性なんてメチャクチャ悪いのに、なんで持ってきたかなぁ？メンテとかよりも車体を磨くのに凄い時間がかかる。
後、蛇足なのだが学園艦の残念な点として本などの入荷が遅れる事があるという事だ。
お気に入りの作者の新刊や読みたい漫画の新刊が一週間程遅れたり、週間連載の少年ジャン◯とかも一、二日入荷が遅れるなんてよくある事だ。
ただ、やはりこんな場所でもａｍ◯ｚｏｎは優秀であり、期限内に届けてくれる。ネット通販は偉大だなぁ。
ｙｅａｈ月ｙｅａｈ日
この黒森峰で一番手こずったのは何か？
何かって言われたら一つしかない。コミュニケーションをとることだ。男子と女子という違いは中二の男女にはかなり重くのしかかってくる問題だ。お互いに異性として意識し始め、男女別のグループが自然とできあがり、どちらかに異性が混じるなど考えられないような事になるのだ。が、俺は残念ながら編入生なので男子グループに全く馴染めていない。唯一の望みは整備チームの面々だった。整備チームの面々とは毎日顔を合わせる中なのでそれなりの交流はあったのでここから仲良くなるしかないと思って、嫌われないように日々なんて声をかけようか悩んでいたものだ。
しかし、そんな心配は杞憂に終わった。ある日復習代わりに大型の武装車両を一人で整備していたら、整備チームの子が声をかけてきたのだ。なんでもこの大型の武装車両の整備は経験がないらしく、どうやって整備しているのか教えて欲しいそう。
俺はコーチが教えてくれた小学生でも分かる武装車両の整備の説明を思い出しながら、実際に整備して見せたり、させてみたりしながら丁寧に教えてあげた。するといつの間にか何人もの子が集まってきていて、その子達も武装車両の整備に興味があるらしく、俺はそ

の子達にも分かりやすいように最初から教えてあげた。そうしていたらまた別の子が興味本位でこっちに来ていて、また教えてあげて、そんな事を続けていたら整備チーム全員集まって来ていて、いつの間にか大説明会が始まっていて、そんな中一つの質問が飛んできて、そしたらそれに最初に教えて欲しいって言ってきた子が答えて、そしてその子はカスタマイズが好き得意だったらしく、改造案を言い出して、そしたらその場が凄い白熱し始めて、滅茶苦茶意見が飛び交う大討論会が始まった。俺はその熱を冷ます事は出来ず、逆に意見した改造案にはみんな賛成して更にその上に改造を施す魔改造案の討論会が発生して、先生にもう帰りなさいと叱られるまで続いた。

帰り際に明日はこの案を実際に試すから早めに集合しなさいよと整備チームのリーダーに命令されて、忙しい一日は終わった。

何というか、みんな整備が大好きな子達で集まっているんだなぁと実感した。あそこまで盛り上がるなんて考えてもみなかった。戦車に乗ってる子達は何が起こっているのか分かんなくて呆然としていたしのが見えたし。けど、俺も整備はとっても好きなのだ、ここのみんなとは仲良くなれるだろう。さて、明日に備えて早く寝よう。

ｗｅｒｅ月ＷＡＯ日

整備チームの面々と仲良くなれて魔改造や討論会で滅茶苦茶濃い１ヶ月が経ったある日、俺の待ち望んだ日がきた。とうとう俺たちにも中戦車の整備許可がおりたのだ。これには整備チームの二年生は狂喜乱舞、三年生は二年生を嬉しそうに向かい入れ、まだ年齢的に軽・豆戦車しか整備できない一年生は悔し涙目を飲んだ。

多分、今日から整備チームの二、三年生と一緒に中戦車の整備に付きっ切りになるだろう。済まない一年生よ、代わりに軽、豆戦車と武装車両の整備の仕方を分かりやすくみんなでノートに纏めておいたからこれで許してヒヤシンス。

Ｍｙ月ｍｙ日

今日は戦車乗りや整備士も全員集合しての豪勢なパーティがあった。なんでも、高等部の方の戦車道の大会で優勝したらしく、それを祝うためのパーティらしかった。

ただ、なんと言うのだろう、上下関係が凄まじく高等部に知人がいない中学生はなかなか高校生に歩み寄れず遠くから眺めるのみだった。戦車乗りの子達はお姉様ステキみたいな感じで遠巻きから眺めるのみだった。ただし、それは戦車乗りの子達に限ってのお話だ。俺たち整備チームは年上の経験豊富な整備チームから意見を貰うために中戦車の整備データや改造案を書き込んだノートを持参したのだ。ふっふっふっ、マジでこのノート書くためだけに資料室に引きこもったり、戦車倉庫で夜遅くまで試行錯誤を繰り広げたんだ。これに反応しないはずがないですよねぇ？

なんて思っていた俺をぶん殴りたい。意気揚々とこのノートを高校生の整備チームに見せたら、捕まって、戦車倉庫に連行されそうになって、それにウチラの整備チームが待ったをかけて、興奮冷めやらぬままに整備についての大討論会がパーティそっちのけで始まってしまった。

戦車乗りの子達はいきなり始まったこの白熱した討論会に目を丸にして呆然とするしかなかった。俺も俺そっちのけで始まったこの討論会を前に恐れおののき敵前逃亡を図ろうとしたが、それを高校生の整備チームのメンバーに発見され、両脇をガッチリ掴まれ討論会に連行させられた。

その後は殆ど討論会の真ん中で揉みくちゃにされて、知識と経験を絞り取られ、高等部の部長さんが止めに来るまで延々とダシにされ続けた。お陰で、討論会から解放された時にはノンアルコールビールも飲んでいないというのに脚はフラフラ体はボロボロになっていたらしい。

女の子って怖いんだなって実感した。

ｙｅａｈ月ｌａｂ日

【悲報】災難はまだ続いていた。

俺の知らぬ内に中高合同の整備チームの交流会が企画されていて、同然のように俺も駆り出された。中戦車もまだ完全に整備できてないのに連れて行くなと抗議したが、お前の完全は他人からしたら魔改造に匹敵するんだから付いて来いとよく分からない理論を展開さ

れ強制召喚されられた。
召喚させられた先、高校生の戦車倉庫ではパーティの時に見た精鋭方が揃っていた。今回はノウハウを教えてくれるらしいのと、中学生が出す新鮮な意見を聞きたいということで、討論会よりかは落ち着いた雰囲気の中交流会は始まった。というか、あんなに熱くなっていた人達だとは思えないくらいに理性的にこちらにノウハウを教えてくれて本当に同一人物なのかと疑った。けど、実践の方まで行ったらやっぱり同一人物だわと納得した。だって俺馬車馬のように働かされたもん。俺が小学生の頃からの整備に関してのノウハウがあるからって、あっちの方が俺の経験吸い取っていったもん。なんなの？最近なんなの？俺なんでこんな役回りされられてるの？

ｈｅｈ月ｈｅｙ日

今日、夢を見た。前から見ている、戦車に乗る夢だ。ただ、今回だけはいつもと違った、今回は悪夢だった。
自分の載っている戦車は待ち伏せされていて、油断した一瞬の隙に砲撃が命中し、凄まじい衝撃がきたと思ったら、下から鉄も体も溶かす程の灼熱が襲いかかってきて、死ぬと思った瞬間に目の前が真っ白になって死んだ。多分火薬に火がついて爆発したんだと思う。
けれども、それはどうでも良い。だって、あまりにも感じたこと全てがリアル過ぎて、これは夢だとは割り切れない程の情報量で、本当に一度死んだんじゃないかって、起きた後も自分が本当に生きているのか確信が持てなかった。
ただ、これは教訓になった。戦車とは本来人殺しの兵器だ。これは簡単に人を殺せるモノだ。だからこそ、俺たち整備士が頑張らなければいけない。俺たちは言葉通り戦車乗り達の命を預かっているんだから。

Ｏｉ月ｌａｂ日

死んだ夢を見た日から直感がまた強くなった。というか本当にニュータイ〇なんじゃないかと思うぐらい強くなった。修理箇所を当てる直感はますます細かい所まで分かるようになったし、最近では観戦している戦車道の試合で相手がどう動くのか当てられるように

なってきた。一番冴えている時には人の簡単な感情さえも読むことができる。

この能力は誰にも言った事はないし、明らかに人外の能力だ。それに信じるヤツなんていない事も容易に想像できる。この能力、多分死んだ夢が関係しているとは思うんだけど、もしかして一度死んだも同然の経験をしたから生存本能がフルに動いて脳みそのリミッターが外れたとか？ないない、そんなオカルトあってたまるかよ。

ＷＡＯ月ＷＡＯ日

今日たまたまカレンダーを見たらもう三月に差し掛かっていた。今日、たまたまこの日記を見たら半年ぐらい書いてなかった。特に大きな事は無かったけど、ずっと忙しくてなかなか日記を書けなかった。

いや、ホントここに来てから戦車が整備が好きな友達（全員女子）が大量にできたのはとても嬉しかった。戦車が好きな人が近くにいるって凄く良いなと思った。

後、妹は今年も快進撃だった。砲撃の大会では今年も全国一位に輝き、卓上演習の大会でもベスト８まで残った。強すぎて草生えるわ。

俺は個人の整備部門で優勝をぶんどってきた。自慢じゃないよ。

今年の初めには別れを経験して悲しいかったけど、新しい環境に無事慣れる事ができたし、新しい友達もたくさん作る事ができた。来年は最高学年として後輩たちを引っ張っていけるよう頑張ろう。あわよくば男性部員を獲得しよう。

それに、来年からは妹も中一になり、この学校に入学してくる。

その時にここの戦車道は良い所だと言わせられるように頑張ろう。

ただ、一つだけ気がかりな事がある。エリカとの約束だ。

俺たちは熊本に引っ越したから、いつも会っていた航空祭にはもう行けない。物理的に難しい。

エリカは雑誌で俺たちの事を知っていたから、引っ越して黒森峰にいる事を知っていたら良いんだけど。

ただ、起きてしまった事はしょうがない、奇跡的に会える機会があるのなら、彼女に会えなかった事を謝ろう、今はそうしておくしかない。

中学時代の日記　その２

Ｋ月Ｋ日

中学三年生になった。妹は中学一年生になりこの黒森峰に入学してくる事になった。入学祝いは無論高級なしゃぶしゃぶのお店。そして、俺の入学祝いの時よりも豪華である。可愛い妹だからね、もっと豪勢に祝ってやれ！

ＭＥ月ＭＥ日

今日は新入部員の歓迎会があった。戦車道は部活とは違い、授業での履修という形をとっているので、部活動よりも新入部員が入るのは早い。後、豆知識なのだが、中学校は義務教育なので高校生と同じように戦車道に時間を割くことができるわけではない。それに必修科目は決まっている訳だから、全校生徒で受けるテストには戦車道履修者だからってテストが簡単になる措置なんかないし、何か特別な待遇がある訳でもない。中学生なので留年や退学が無いとはいえ、気を抜くと一気に成績は悲惨な事になるのだ。この俺のように。

中学校の勉強は高校での勉強の基礎になる物が多いし、このエレベーターシステムの学校だ、成績も評価もより細かく中等部の先生から高等部の先生に伝わってしまう。なので、高校で少しでも先生に目をつけられたくなかったら中学校の勉強を意地でも頑張らなければいけないのだ。

閑話休題。

ともかく、今日新入部員が多く入ってきた。小学生から上がりたての子供というのは中学生のはずなのにやたらと小さく見えたのが印象的だった。まあ、ほとんどが女子なので当たり前っちゃあ、当たり前なんだけど。ちなみに男子部員は今年もゼロ。高校生ぐらいにならないと戦車道やってる男子なんて殆どいないそうだ。後、西住流本家の娘さんが今年も入学されるそうで、こちらも話題になっていた。

そして、俺たちにとってもの凄く嬉しいヤツがこの戦車道チーム

に入ってきた。そう、逸見エリカだ。うちの妹もエリカの事を確認した途端エリカに飛びついていった。俺もエリカの所に駆け寄ろうとしたんだけど、冷たい目を向けられた気がした。やっぱり怒っているのか？去年の航空祭に行けなかった事怒っているんだろうなぁ。今回は謝れなかったから、次ちゃんと謝ろう。

それと、普通に歓迎会は楽しく終える事ができました。

ＮＯ月ＮＯ日

今日、忙しい整備の間を縫ってエリカに会う事ができた。相変わらず俺に冷たい目を向けてくるけど、そんなこと御構い無しに去年行けなかった事を謝った。

エリカは一瞬俺が謝った事にポカーンとしていたようだが、直ぐに意識をこちらに戻し、別にそれくらい良いわよと言った。

俺はそれを嬉しく思って、これから一緒に戦車道をしていく仲だからよろしくな！と握手した。エリカもこれに応じてくれたのだが、どこか気合いが抜けたような顔をして溜息をついていた。最近は俺も人の心を少しは読めるようになってきたと思ったんだけどエリカの心情は全く分からなかった。誰か！教えて！

ＮＯ月ＹＥＳ日

さて、中学生の戦車道の大会は高校生と同じ時期に開催される訳では無く、普通に夏休みに開催される。なぜかって？義務教育だからだよ。学校を何日も休んで戦車道をするというのは礼節のある、淑やかで慎ましく、凛々しい婦女子を育成するという理念に反するし、教育委員会の理念からも外れる。別に超忙しい人気俳優な訳でもないので、学業に専念させる為に大会の日時が夏休み中になっているのだ。

と言うことは、俺たちには高校の戦車道よりも選手の育成に時間を掛ける事ができるのだ。

戦車乗りの子達も厳しい練習をしているが、俺たち整備士連中も次の大会に迎え、新たなステージに進む事を決意した。

その名も【私たちの考えた最強の戦車作戦】だ。別に新しく戦車を作る訳ではない。ただ、戦車を一台残らず部品の隅から隅まで点検

し、現代のパーツと取り換えられるものがあるなら取り換える。違反ギリギリまで攻めた強化をする、戦車の基礎能力や信頼性を徹底的に叩き上げる作戦だ。それに加え、この作戦にはもう一つ重要な仕事がある。それは、そのチームにあった最善のカスタムチューニングを施すこと。それぞれの戦車にそれぞれの整備士が付き、その戦車に乗っている戦車乗りたちに合わせた改造を施していく、いわゆる専用機にしてしまおうと言うのが今回の一番重要な作戦内容だ。これには戦車乗りとのコミュニケーションも勿論重要だが、整備士自らがその戦車が実戦で動いている所を確認し、問題点を洗い出し、より良く整備していく。この作戦のせいで、俺たち整備士なのに一から戦車戦における戦略を勉強しなければいけない事になった。俺は別にいいじゃんと反対したのだが、他の連中はめっぽうやる気で、そいつらに最善の整備をするんだからそいつらの役目も、その役目が戦略上どのような働きをするのか知ってなきゃダメじゃんと一蹴され、大勉強会が開催された。俺はガチで嫌だったので、すっぽかしたかったのだが、朝早くから寮部屋の前で待機され、出席する事を強要された。俺に選択肢など残されていなかった。ガチで戦略なんてカケラも知らなかったが、今回の事で少しは戦略について理解できたと思う。え？お前充分理解できてるじゃんて？バカ言うな、教科書に載ってるような事は覚えたが発展的にしろとか言われると途端に分からなくなる。逆にテメーら随分詳しく理解できてるようじゃないか、エルヴィン・ロンメルの戦略を一から十まで理解できてそうな子めっさいるやんけ。俺めっさ驚いたよ。本当にマジで、狂ってるぐらい勤勉なヤツらめ。

ＹＥＳ月ＹＥＳ日

やっぱり、豆・軽戦車の整備にしか参加できない一年生連中、中戦車の整備資格を与えられていない二年生連中はこの作戦に参加できない事を泣いて悔しがっていた。しゃあないやん、安全性の為戦車の整備は年齢制限とか厳しいんやから。ただ、戦車乗りは残念ながらここら辺の安全意識は低く小学生でも戦車道の大会はある。マジで安全性がどうなっているのか、甚だ疑問である。まあ、この作戦終わったらデータ全部纏めてお前らに渡してやるからそれを楽しみに

待っときや！

ｉｓ月ｂｒｅａｋｉｎｇ　Ｔｉｍｅ日

と言う訳で、俺の担当戦車は西住流で有名な西住まほさんの戦車になりましたー。やめろや、やめろや、なんでこんなスゲー人の担当になっとるんワレェ!!

ええ～、だって二年生にして最早隊長やし、小学生の頃も随分ブイブイ言わせとったんやろ？高等部でも隊長の座は確約されているも同然なんやろ？うわー、マジかよー。

え？確かに、前リーダーが高等部に上がったから、現リーダーに指名されたのはワイですよ？確かに、今ワタクシがこの黒森峰整備班班長ですけど？え？でも実力的にもっといいヤツおるやろ？

え？いない？今お前が一番この黒森峰中等部で良い整備するって？やめろや、そんな嘘やめーや！は？これについては多数決によって決まりました？満場一致でした？え？マジ、俺これ避けられない運命？ワイの妹と最近友達になった西住みほちゃんたちが乗る戦車整備できひんと？あ、そうなんですねー、分かりました、諦めまーす。クソッがっ!!

ＮＯＷ月なう日

まほ様の戦車の整備士になった憐れな子豚な俺、いや、嫌な訳じゃないよ？とても名誉な事だよ？だからまほ様のファンクラブの方々（主に女子）、その手に持ったレンチを下ろそうか、俺の頭が海底都市のスプライサーみたいになる前に。え？ダメ、お姉様に男が近づくのは許されない？え？仕方なくね？俺のせいじゃなくね？は？問答無用？え、はっ、ちょ、にぎゃあああああああああああああぁ!?

という茶番は置いといて、真面目な事を書くと、確かにこの子の戦車整備は難しい。戦車の操縦が荒いという訳ではないのだが、他の戦車と比べると走っている距離も長ければ、足場の悪い所を走っている事も多い。それに加え、この子の頭の中の戦略とか俺一切分かんないから、一緒のチームのヤツと頭捻って考えて、なんとか最善の改造を施そうとしている。西住自体にも聞きまくって、そこら辺は意見し

てくれてるんだけど、長く話すとマジで親衛隊の方々の粛清を喰らいそうで怖い。
ちょうど西住まほの専属チームになった時ら辺からエリカも冷たい目から絶対零度の目に変わったので怖い。
まあ、そうゆう外的要因も色々あるのだが隊長機の整備の手を抜くなんてできない。最早完璧に近い整備だが、もっと完璧を求めるために日々専属チームと話し合いを行っている。最高の戦車にしなければ（使命感）
あ、後、うちの妹とその友達の西住みほちゃんは一緒の戦車に乗ってスタメン入りだそうです。マジでスゴイナワレェ!!
ＮＯＷ月ＬＵＮＡ日
やって参りましたー、高等部優勝祝い～。
正直言って出席したくない～、また拉致られるだけだから～。
という事で、隅っこ暮らしする事にしました～、人混みの苦手な妹も一緒に隅っこ暮らしする事になりました～。
まあ、最終的には高校生に拉致られて酔っ払ったみたいになってる上級生に揉みくちゃにされて、今回もゴッソリ（整備の知識）絞られたけどね～。
まあ、良いこともあった。妹の友達だと言う西住みほさんと知り合いになれた。彼女は人見知りなところがあるようで、入学早々仲良くなった妹のところへと逃げて来たところで会った。印象としては、ちゃんとした良い子だった。うちの妹は時々暴走するので、いざとなったらそれを止めて欲しいと頼んでおいた。
さらに、エリカと話す事もできた。友達と飲んでいたようなのだか、こちらを確認すると気分が良くなっていたのか、少し甘えるような感じでこれまでの事を聞いてきた。特に面白い話もないが、俺もここにきてからの事を話した。すると、エリカも昔の事を少し話してくれた。その日はエリカとの話はそれで終わったけど、これだけでも収穫はあったと思う。本当に、連行されなければ最高だったのに…
ｗａｓ月ＹＥＳ日
とか書いてた前回から数ヶ月過ぎ、大会も終わった季節でござい

ます。最早、我が軍は圧倒的じゃないかぁ!!状態でした。　うちの戦車に乗ってる皆んなが強いって言うのもあると思うけど、俺たちの戦車整備の実力も相まっての勝利だと言えるだろう。まあ、こういうのは凄く嬉しいのだが、毎日が戦いだったので今はとりあえず休みが欲しい。凄く欲しい。だが、俺たちの戦いはまだ続いているのだ!!物語的なナレーションとかじゃなくてね、ガチでまだ続いていて次はまた夏休みの間に整備部門での大会が開かれる。俺たちはそこにチーム戦で出場予定だからその練習をしなければいけないのだ。それに、戦車道などは開催するのに莫大な金が掛かるから頻繁に開催できないが、整備大会だったり砲撃大会だったりは戦車道に比べて断然お金が掛からない。だから意外とそこら辺の大会は多く開催さらているのだ。うちの妹なんかは砲撃の大会に参加するし、もしかしたら世界大会まで狙えるところにいると言う。俺たちも何処まで行けるか分からないが頑張らなければいけない。

後、妹の乗る戦車は大活躍したらしい。なんでも妹の乗る戦車の命中率が９０％いきそうな勢いだったとか。学生、旧式の戦車がほとんどという条件下ではかなりヤバめの命中率だそうだ。やったな妹！スゴイぞ妹!!

ＰＡＹ月ＰＥＩ日

今日は整備大会の本番だった。

俺は初めてのチーム戦での出場にだった。少々緊張したが無事に勝ち進む事ができた。明日は準決勝、決勝があってそれに勝てれば優勝できる。

さあ、俺たちは散々練習三昧の日々を送ってきたんだ。ここで優勝もぎ取ってやろうぜ!!

ｐａｙ月ｐａｙ日

やった！やった！やった！うあー!!

優勝したぞ!!ガチでいったぞ!!

嬉しい、滅茶苦茶嬉しい!!個人戦では何回か優勝した事があるとはいえ、ここで優勝できたのは嬉しいという言葉しかでない!!

今回ばかりはチームメンバーが全員女子だけど、皆んな抱き合っ

て喜んだ。一人で努力するより、皆んなで努力する。チームスポーツにおいて当たり前のことなのだろうか、本当に皆んなで遅くまで研究して、練習して勝ち取った勝利なのだ。誰も離脱する事なく、全員で同じ目標を見据えて勝ち取った勝利なのだ。その嬉しさと言ったら、もう!!なんでしょう、この整備士が裏方ではなく表に立って出れる大会というのは貴重だし、俺たちも滅多に体験できないものだ。それがこういう形で結果に出るのはスゴイ嬉しい。本当に俺たち日本一なんだとより実感できて嬉しい。俺たちはこれで中学生の大会は最後だが、来年も黒森峰が優勝できるよう、後輩にしっかりとノウハウを受け継いでいこう。

ｎｕｒｓｅ月Ｄｏｃｔｏｒ日

【吉報】妹、世界に羽ばたきます。

とうとう日本の砲撃大会で最高得点を叩き出しまくった妹はジュニアの代表選手に選ばれ、この冬世界大会でその腕を発揮します。

やはり妹は凄すぎた、多分戦車乗りじゃなくてもその腕だけで食っていけると思うよ？

ＢＡＲ月ｂｕｙ日

夏の大会が終わった後、基本的に三年生は引退という流れだが、ここ黒森峰は中等部から高等部はエレベーターなので、別に試験を受ける必要はない。なので、部活動などの活動は他の学校よりも必然的に長く参加しなければいけない。俺たちもそうで、日々後輩へのノウハウの受け継ぎに奔走している。

ついでに、整備班班長の座も後輩に譲っており、早いうちから皆んなを纏めることを覚えさせてる。その後輩もなかなか筋がいいので良い整備士になりそうだ。

さて、毎日ノウハウ受け継ぎの為に奔走しているとは言え、俺たちはテストにも気合いを入れていかなければならない。前までは見逃されていたところあるのだが、主要大会が終わった今、テストの成績の悪い奴らは強制的に補修に参加しなければならない。これがマジで辛い。なぜなら俺も成績悪い組に入っているからである。補修

に捕まったら整備の場には顔を出せない、放課後ずっと教師と補修だからだ。
それは困ると同級生たちは俺の為に勉強会を開いてくれた。有り難や有り難や。この頭悪い俺を導いてくれっ!!
ｆｕｃｋ月ｐａｙ日
へっへっへっ、全てのテスト平均点の少し下ぐらいに着く事ができた。良かった、ガチで良かった。それぐらい普通だろと思う人もいると思うがマジで勉強できないヤツは本当に勉強できないんだから、許して欲しい。
俺は戦車が好きだから戦車に関する知識は一瞬で覚えられるけど、興味がないものはいつまで経っても覚えられない。本当にそうゆう性格なのでこれだけでも俺嬉しいっす。
ｋｉｃｋ月ｋｉｃｋ日
最近、試験的にだが高校生の整備に参加させて貰っている。
中等部から高等部の戦車道をするヤツは全員参加している。俺たちは高等部に入る事は確実なのだから今から先輩方との連携を練習しておくのだ。けど、普通に去年の先輩方もいて結構馴染みやすかった。それに中等部にはいない男の先輩もいる、久々に男同士の気の使わない会話は楽し買った。
高等部はテストが難しくなって留年の危険性があるからテストは嫌だが、整備は楽しくなりそうなのでマジで早く高校生になりたい。
ｋｉｃｋ月ｙｅａｒ日
【続報】妹無双がすごすぎる件
あやつ砲撃の大会でベスト４入りを果たしやがった。世界大会だ、あいつは全国大会じゃなくて世界大会でベスト４に入ったんだ。ヤバイ、ヤバめだよ、あいつの腕は世界レベルなんだよ。お兄ちゃんの建てた功績なんて吹っ飛ぶぐらいスゴイよアイツ。
多分これからも戦車道で目覚ましい活躍をするんだろうな。お兄ちゃん期待してるよ。それしか言えない。
ｙｅａｒ月ｙｅａｒ日

卒業の日が近づいてまいりました～。
俺ももう高校生でーす。中学生を卒業で～す。
この三年間楽しい事も、悲しい事もあったし、滅茶苦茶頑張ってたと思う。必死に駆け抜けた三年間だった。今の環境とは別れ新しい生活を送ることになるが、仲間に関してはしばしの別れをするだけだ。悲しくなんかない。
さてと、卒業式で俺の役割なんてなにもないが、せめて卒業生らしく堂々としていよう。後輩が目指してくれる背中を見せれるように。
ｗａｓ月ｐａｙ日
今日、卒業式だった。
泣きそうになった、けど泣かなかった。そんな姿見せられん、俺は男だからな。
最後に皆んなで記念撮影をした。別にお別れという訳でもないのに目頭が熱くなってしまった。改めて、この三年間がどれだけ大事だったのかが分かった。
高等部に入っても、大事にしたいと思える、皆んなが思える、そんな戦車道にしていきたい。いや、していこうと思った。

他人視点

逸見エリカの場合

私、逸見エリカは劣等感を感じている。

別に、西住流の後継者に抱いている訳ではない。他の仲間に抱いている訳でもない。あの生意気な泣き虫は別だが。

ただ、あの兄妹に対して私は強い劣等感を抱いていた。

昔は何も気にせず、一年に一度会える友達という関係の中で楽しく過ごせていた。あの優しい兄にも、人懐っこい妹にも劣等感なんて全く抱いていなかった。

劣等感を抱き始めたのは小学六年生になった頃だろうか？

西住流という頂点を知って、その前にいくつも聳え立つ壁を知った。生半可な努力で超えられない壁は、私の戦車道への印象をジワジワと変えていった。

その中で、殆ど知らないけど、一年に一度だけ会える戦車道をしている兄妹のことを思う事もあった。

けど、私は思い知らされた。あの兄妹との才能、天才と凡才との才能の差ってやつを。

人懐っこい妹は、砲撃の大会で全国1位の座を何年も独占し続けた。優しい兄は黒森峰の戦車道に入り、その整備の基礎能力を、その技術力を飽きることなく底上げしていった。あの西住流の支配下と言ってもいい黒森峰で自分を貫き通していた。

それを知った私は彼らとの差を見せつけられるようで、どれだけ練習に励んでも追いつけない両者の差に現実から目を逸らしたくなった。

小学六年生の航空祭の時もそうだ。

あの二人は時航空祭にこなかった。分かってる、彼らは多分ここに来る手段を持っていない。彼らが熊本に引っ越した事は知っている、熊本から北陸は遠いことも知っている。彼らは私みたいに裕福じゃないんだから来れない事なんて分かっている。

でもあの二人は戦車道に忙しくて、毎年会ってたはずの私を放っ

て、自分との差を広げているんだと思うと惨めになった。
同じ場所に立っていると思っていた彼らは私の知らないうちに随分遠くまで進んでいる。私はただ勘違いをしていたんだと気付かされた。彼らと同じ道を、いや下手したら彼らより良い環境の中進んできたはずの道なのに、結果は天と地の差だ。
だから、戦車道に全力を注いだ。また、あの兄妹の隣に立てるようにと頑張った。
大会で結果も残した。戦車の全てを知ろうと猛練習もした。
妹も入るであろう黒森峰にも合格した。彼らの大会も、西住流の大会も、テレビの前で飽きる程見た。
けど、いざ彼らと会ってみれば、彼らは余りにも自然体で、まるで私のことなんて気にしていないようで、余りにも腹にきた。私は頑張っている、多くのものを我慢してここに立っている。なのに、なんでこの兄妹はそんな全てのものを得ているような顔でいられるのか分からなかった。
理不尽だとわかっているのに、余りにも腹が立ち過ぎてあの兄を睨んでしまった。
それに後日、あの兄はわざわざ航空祭に来れなかった事を謝りにきた。私が兄妹が来れなかった理由なんて分かっていると理解しているはずなのに、律儀にも謝りに来た。
私は知らず知らずのうちに彼を睨んでいたけど、彼は私の手を取り、これから同じチーム同士よろしく!と、能天気な声でとても嬉しそうに言い放った。
身構えてる私があまりにも馬鹿な事をしていると思わされる声で、溜息をついてしまった。知っているのに、本格的に戦車道の活動が始まれば否応なく彼らとの差を知ることになるだろう。
彼らとの差をその身をもって実感することになるだろう。
けど、何故か期待してしまった。彼らとより近い距離で戦車道をできるんじゃないかと、同じステージに立って戦車道をできるんじゃないかと。
それが、いけなかった。

妹は西住流後継者の西住みほと組んで、その圧倒的な技術でその才能を黒森峰に示した。
個人的にも、砲撃の世界大会なんかに出場し世界レベルの実力を見せ付けた。
兄は中学生の範疇に収まらない整備方法を確立し、実際に実用化し、黒森峰の圧倒的な勝利への基盤を作りあげた。整備大会も国内の大会でいろんな部門を総ナメし、圧倒的実力を知らしめた。
それに引き換え私はスタメンには入れたものの、妹程のスコアは叩き出せない、兄程勝利に貢献できない、個人で何か突出した能力を持っている訳でもない。
結局、劣等感は強まるばかりだった。
けど、努力する事を止める事なんてできなかった。彼も彼女も、気づけば練習している。気づいたら、彼らは努力している。
周りの何倍も努力をしている。
それなのに、私が努力しないなんてできなかった。これ以上彼らとの距離が開くのがイヤだった。
だからある日、意を決して妹に聞いてみた。
何でそんなに努力できるのかと？
妹はなんでもない風にこう答えた
「好きだから」
「私の中で一番好きなものだから、飽き性の私が唯一続けてきたものだから。戦車に乗っている時が一番楽しい。仲間と戦車に乗っている時が一番楽しい。」
「多分兄さんもそう答える、兄さんも戦車が好きだがら努力してる、戦車が好きだから、できる事はなんでもする、日々できる事を増やしてる。私も兄も好きだから、ここまで頑張ってる」
と、なんでもない風に答えた事。
けど、私にはどこか衝撃的だった。
思えば私は戦車道を通して誰かを追いかけていたように思える。戦車道を楽しむんじゃなくて、戦車道のその先にある何かをボンヤリと求めていたように思える。

彼女は多分、戦車道の世界に私がいなくても、西住まほがいなくても、西住みほがいなくても、彼女の兄がいなくても、彼女は彼女のままなのだろう。あの妹は戦車道が大好きな妹のままであり続けるのだろう。

そう思うと、馬鹿らしくなった。

誰かに縋る戦車道が馬鹿らしくなった。

けど、それなら私は何を目指して戦車道をすればいいのだろう？

何をすればあの兄妹に追いつけるのだろう？

分からない、分かるはずもない。

私だけの、私にしかない、変わらないモノ。

それはなんなのかやっぱり分からなくて、でも西住にも、兄妹にも近づきたくて、必死に頭を捻るけど何も浮かばなくて落ち込んで。

私は分からないことだらけの中で、戦車道に励むしかなかった。

??

整備チームの場合

黒森峰の整備班はここ数年で良い方向に大きく変わった。

それもこれも彼、”鉄（くろがね）黒兎（くろと）”が黒森峰に編入して来たおかげだろう。

クロトは中学二年生の時に黒森峰に編入してきた。

戦車の整備士を小学生からしているらしい、男子の中でも変わった人だった。

最初は男子が戦車の整備なんてできるのか？と思っていた。

高校には男の先輩がいる事は知っているけど中学で男の子の整備士は見たことが無かったし、車両関係での男性の整備士は多いが戦車道関係での男性整備士などあまり聞いた事がなかった。

しかし、実際に整備をさせてみれば私達が考えていたよりも圧倒的に巧かった。

豆戦車や軽戦車の整備をほとんど一人でこなし、さらに私達の整備

を覗きに来てはメモをとったり、先生と整備についてずっと話し合っていたこともあった。
そんな中、整備の大会に出る子が「あーー!」っと声を上げた。
なんと、彼は今までにも整備の大会での個人競技に出場しており、小学生の頃すでに全国大会の常連であり、優勝した経験すらある。中学生の時の記録も全国大会で準優勝を勝ち取っている。
中学三年がほとんどの個人競技において全国大会での準優勝というのは予想以上に難しいことだ、彼が当時中学一年生だということ考えたなら準優勝を勝ち取る難易度は私達には考え付かない程に遠ざかる。
戦車乗り以上に知識と経験が必要とされるのだ、到底無理な話と言えるだろう。
その事を本人に確認した子もいたようで、本人が認めたことから彼が本当に整備士なんだという事がわかった。
それから、私達と彼の間には距離ができた。なんというか、彼のことはどこか馬鹿にしていた気持ちがあったのか罪悪感が沸いてきて話しかけづらかった。彼が男子というのもそれに拍車をかけていた。
彼もこちらとコミュニケーションを取ろうしていることが分かったのだが、どういうリアクションをすれば良いか分からず結局話す事は殆どなかった。
けど、彼と同学年の子が話しかけたことで一気に変わった。
彼女は元々武装車両の整備に行き詰っており、どうすればいいのか悩んでいたようで、意を決して聞きに行ったらしい。
そしたら、意外にも丁寧に教えてくれたらしく、かなり話が弾んだらしい。武装車両の整備なんて全く分からなかったのに短時間で基本的な事は殆ど一人でできるようになってしまった程らしい。
そしたら、遠目で見ていた子達もだんだんと興味を持ち始めてクロトくんに教えて貰うように頼んで、そしたらまた違う子が聞きにきて、それが何度も続いて気付いたらクロトくんが一人で何人もの生徒を教えてて、凄いことになっていた。
その後は、興奮した皆んなが改造案まで出してきて、凄い盛り上

がった。先生が来なければ明日の朝まで続いていたかもしれない。
それに、その後もいろいろと続いた。
高等部の祝勝会でまさか整備チーム同士で討論会になるなんて予想もしてなかったし、そのおかげで高等部とより近い距離で刺激し合えた。
高等部の技術力は凄かったし、整備の仕方も洗礼されており、マニュアル化も完璧だった。
多くの種類の戦車、または戦車以外の整備も高水準に尚且つ素早く整備を可能にする程に。
けど、私たちも負けていない。
クロトくんと皆んなで一から中戦車や重戦車の整備の仕方を洗いざらい見つめ直し、最良の整備を仕方を纏めて更に良いマニュアル作りに取り組んだ。
おかげで、祝勝会の前よりも格段に良いマニュアルが仕上がった。
三年生に上がってからも、私たちの勢いは衰えていなかった。
クロトくんを筆頭に新しい技能の習得に精をだし、高等部の祝勝会の時にもまた討論会が自然に行われたぐらいだ。
しかし、一番私たちを成長させたのは紛れもなくあれだろう。
【私たちの考えた最強の戦車作戦】だろう。
あの作戦を成功させる為に、戦術を一から学んだのだ。
そもそも専用機化なんて中々できるものでも無い。彼自身も構想段階ではあまり乗り気ではなかった。しかし、この案は彼を出したものだし、これが一番だろうとも言っていた。
なら、行動力が格段に付いた私たちが止まる訳もないだろう。
本当に各選手の特徴や癖、成長の余地を探し各チームに合った最適の整備を施す。
その為に全戦車を普段確認しないような細部まで点検したんだから。
その成果もあって、戦車道で今年も優勝する事ができた。
その経験を活かして整備大会でも優勝する事ができた。

なによりも、彼が入った二年間で私たちは格段に成長できた。
彼が入っていなかったらこんなに成長することは無かっただろうと容易に想像できる程に。彼は私たちに無いものをもたらしていったと思う。
彼の一言、彼のノリ、彼の悪ふざけ、彼の情熱、それらは全て私たちの範疇を超えた事を起こす。
彼はただ些細過ぎる起点しか作って無いと言っていたが、その起点を作れるクロトくんは凄いと思う。少なくとも、私たちを動かす事ができているんだから。
私たちは高校生になるが、彼は高校でも私たちの考えつかない事をやってくれるのだろう。どうなるのか、今から楽しみでならない。
戦車道をするのが、楽しみでならない。
さあ、明日はどんな魔改造をしようかな、今から楽しみでならない。
あと、クロトくん君も強制参加なんだから、勉強ぐらいキチッとしてくれよ？

高校生時代の日記

??月◁日

今日は高校の入学式だ。

といっても、登校する場所が大幅に変わる訳では無い。

ほんの少し隣にずれるだけだ。

それに、制服は大きさが合わなくなってきたから買い換えるが、別にデザインは大きく変わる訳では無い。精々、校章や細かい部分が装飾が少し変わるだけだ。

そう、ほんの少しなんだ、パッと見気づかないような変更点しかないんだ。

だから母さん、写真地獄だけは勘弁してくださいお願いしますなんでもしますから。

エ？なんでもするなら写真撮るからって？え？それを止めてください母様やめて母さんやめてーーーーーーーーっ!!?

（それ以上何も書かれていない）

Ｈｅｙ月　帰国子女日

あいるびーばっく。

なんとか生きて帰ってこれたぜ。あの写真地獄からな。

こっそり持ち込んだ伝勇伝すらも読む時間が無かった。

ずっとずっと目が死ぬまで写真屋のスタジオで立ち続けなければいけなかったし、カメラマンさんに笑ってと言われても引き攣った笑みしか浮かべる事ができず、カメラさんすら乾いた笑みを浮かべていた。

我が妹は留守番と言って家から出ようともしなかった。

この裏切り者!!

お前の時はいつも付き添いしてたのに、なんでだっ!!

まあ、兎に角、俺は地獄から抜け出せたのだ！

取り敢えず、今日も今日とて整備用の倉庫に入り浸ろう。

金剛月　デース日

ｙｅａｒ、今日は俺たち新入部員の紹介の日だぜー、ｙｅａｒ。
内部生はそのまま全員高校の戦車道を履修だぜ、ｇｉｒｌ。
高校の戦車道にはそれなりの男子がいて少し嬉しいぜ、ｂｏｙ。
それに男子は競技者は居なくて全員整備士だぜー、やっぱり手に職つけたいんだぜ～、ｕｈ。

まあ、男子同士で話せるだけでもかなり嬉しいぜ。
何故か美女ばかり集まるこの戦車道で、セクハラに気を付けながら会話をするのは正直言ってウンザリしていた。まあ、何人かは変態オヤジみたいに下ネタ連呼するヤツもいたるが。
けど、異性にはやはり変な気を使ってしまうのも事実だ。
それを気にしなくて良いのはやはり良いぜよ。
提督月　夜戦夜戦～日
今日は待ちに待ってない体育祭の日である。
体育祭は別に面白いイベントではないので、さっさと戦車整備をさせて欲しいものである。
そもそもこの学校が女子校だった名残か男女比は断然女子の方が多い。そしてこの学校はかなりの数の生徒を抱えている。
だが、体育祭だから全員が絶対一競技には出場しなければいけない。そのせいで、待ち時間が余りにも膨大なものになってしまう。
勝ち進めればそれなりに出場できるが、いつも運動してるヤツらからすればその運動量は余りにも物足りない。
そして、この学校では運動に関してはほとんどが戦車道をやっている者が上位に躍り出る。その競技と同じ部活動のヤツぐらいしか戦車道をしてる生徒には勝てない。
というか、これは体育祭というが競技の殆どが陸上競技である。そうしないと全生徒を回せないからだ。
俺は砲丸投げに出場したが陸上やってる男子に負けて早々にここで見ているだけになった。リレーもあったのだが、何故かウチのクラスはみんな運動できて、そいつら全員が手持ち無沙汰になるのを回避する為にリレーに参加しようとしてジャンケンになった。

俺はこれも早々に負けた。
リレーに参加して目立つ事もできなくなった。こういう陸上競技において競技を一つ一つやる訳ではなく、トラック種目とフィールド種目は同時にやるので必然的に外周で走ったりするフィールド種目が目立ってしまうのだ。
トラック種目はそもそも観客席から遠いから目立たない。
なので、暇を持て余した男子はスマホを弄るか、女子が運動しているのをヨコシマな目で見ているしかない。
熱心に応援しているヤツもいるが、熱が入り過ぎると運動したくなってしまうので俺はＮＧだ。そもそも声が枯れてしまうと今日の整備でコミュニケーションが取りづらくなってしまう、それは普通にイヤなのでここで大人しく女子の競技を見ているのだ。
我が妹は足が速くリレーにも出場している。羨ましい限りだ。
お、あの子イイ胸してるな～。
榛名月　大丈夫日
戦車道の大会は六月から始まる。
他の部の総体とかインターハイと被らないようにするのと、地区予選などないので他の部よりは少し始まるのが遅めの六月だ。他の部は五月の終わり頃に予選が始まる。
俺たちは大会に向けて絶賛練習中だ。現在黒森峰は大会で７連覇を果たしている。この大会で８連覇を達成できるかできないかが掛かっている。
しかも来年は西住家のお嬢様がこの学校に入ってくる。ここで繋げられないのは俺たちの後々に影響を及ぼしてくるだろう。
だから皆んな必死で練習している。
そりゃもう、凄く必死で。
俺は俺でティガーやマウスなどのドイツ戦車を整備できてウハウハな気分だ。
流石にこの短期間で中学生の時にやっていた専用車化は難しいが、それでも最高のパフォーマンスで試合に臨めるよう俺たちも頑張るだけだ。

提督月　駆けっこー日
大会の初戦があった。
我が軍の圧勝である。
圧巻の光景である。
おかけでこちらも整備の内容が少なくてとても助かる。
だからそこ、データが取れたからって強化案を出さない。
は？そんな短時間に強化できません。
フルアーマーユニコーンみたいに？馬鹿っ！あれはモビルスーツで尚且つ大出力だからできたことなの！
戦車とモビルスーツは別物なんだよ！分かって！
妙高月　中破日
正直に言おう、決勝戦のプラウダ戦ではこちらもそれなりの損害を出されたがウチの勝利で終わった。
あちらサンも必死だったが、こちら側も必死だった。
そうだよね、来年西住の家の者が来るのにここで連覇記録止められないよね。
西住しほサン、凄く怖そうな人だったもんね。
俺もあんな怖そうな人に叱られたくないや。
多分早々に飽きて上の空になっちゃうや。
まあ、でも俺も一年生の身で数多くの現場に駆り出され、良い経験を積めた。
これからも順当に力をつけていければ良いと思う。
だからお願いです、マッドな奴らには関わりたくないです、お願いです、絡まないでください。
フフフ月　怖いか日
大会優勝の祝賀会が行われた。
俺は参加自体しようとなんて思ってなかった。
けど、可愛い妹とエリカに誘われたから仕方なしに出席ただけだ。
そう、そうなんだ。
スミの方で妹やエリカや妹の友達のみほちゃんと喋っていただ

けなんだ。
だからやめろ整備狂い共、俺に狙いを定めるな、俺ににじり寄るな、頼むから静かに過ごさせてくれ。
俺の仲間のはずな男子共は可愛い子と話していたからって嫉妬して助け舟を出してくれそうにない。
むしろ、女子に誘われて羨ましいと思っているようだ。
はあ？お前ここ変わってみろやー、これから始まるのは地獄やでー！
兎に角、助けてが来ない事を悟った俺は全力で逃げた。
それはもう、夕日に向かって駆けたというメロスよりも速く走った自信がある。
が、俺は罠に引っかかり、網で捕獲され、縄でグルグル巻きにされ連行された。
周りはその奇行にドン引きだった。
俺は泣くしかなかった。
流石に男子も同情してくれた。でも、助けてくれなかった。
西住家の者がいる席でこんな事して良いのだろうか？
そんな疑問が浮かんだが、俺の力ではどうにもならないので、考えることをやめた。
烈風月　いえ、知らない子ですね日
俺たちからすれば、新人戦がわりとなる戦車道の競技が細分化された大会の整備部門での優勝を目指して日々特訓が始まった。
けど俺はそんな事は関係がない、と言えば違うが、優先するものが違う。
期末だ、夏休み前の期末テストが待っている。
思えば一学期の中間は散々な結果だった。
誰にも見せたくない結果だった。学校やめようかと思った。
けど、やめれる訳もない。ここで戦車道やってるんだ。
それにどうせ、陸上自衛隊の整備士の仕事に就こうとしても親に士官学校に入れられるのがオチだろう。
正直言って、あんな厳しいところお断りだ。

まだ、ここでマッドなヤツらに付き合う方がマシ……じゃないかもしれないが兎に角入るのは御免だ。
留年なんて絶対にしたくない。
この期末頑張らなければいけない。
本当は中間に頑張らなければいけないのかもしれないが、戦車道で忙しかったんだから仕方がない。
補修をすっぽかしたのも仕方がない。
取り敢えず、結果を出さなければ。
雷の月　本気を見るのです日
期末はなんとか全教科赤点回避に成功した。
平均点を少し超えた教科もあった。それは嬉しかった。
でも、周りのヤツラはもっと優秀な点を取ってくるので、テスト返しの時期は憂鬱でしかない。
早く～、早く～、終わってくれ～！ _ ：(゜、」 ∠)：
なの月　デス！日
夏休みに突入した。
うちには合宿は無い。例年通りなら。
今回は体力をつける為山の方に合宿することになった。
ここら辺でも散々浜辺でダッシュとかしてたのに、山でもそんなことするのか、やだなぁ。
浜辺、走りにくいし、十分な負荷かかってんだけどなぁ。
それに合宿先では戦車を触る機会も少ない。
合宿先より、ウチの整備室の方が設備が良いことが多いからだ。
戦車道ができる設備があるとは言え、その規模もうちの設備よりは小規模だ。
それに、戦車道ができる合宿先など少なく、他の学校と被る事も多い。
それなので、合宿先での親善試合以外では殆ど体作りに時間を割かれる。
整備士も漏れなく体作りをしなければいけず、俺はげんなりした気持ちにしかならない。

いくらバーベキューができるからってそんなに嬉しいことなのか？

艦隊の月　アイドル日

合宿が終わった、つらたん、ヤバたん、言うてまーす、主に俺が。

いや、それでもこれ以上走れなくて隅の方でリタイアしてしまう人もそれなりに出てくる中、最後までやりきった俺を褒めて欲しいぐらいだ。

バーベキューは楽しかったが俺はしゃぶしゃぶ派なのでもっとやらかい肉をくれ。

ともかく、生還した俺は今、バーにいる。

え？なんで？なんだかって？

説明しよう、夏休み前俺はある問題児と呼ばれている男子生徒達と仲良くなったのだ。

そいつらの何人かは戦車道を履修しているが、毎日出てる訳ではなく、性格に難ありと言われている奴らだった。しかし、成績は優秀だし確かな腕前をしていることから少し有名だった奴らだ。

兎も角、そいつらの知り合いが学園艦の深部で営業しているという知る人ぞ知るオカマバーに案内してくれたという訳だ。

バーの名前はバー・デイック。

日本語に直したら"掘る"という意味だ。

何を掘ると言うのか？（ケツとか言う回答は勘弁だ）

だが、ここにいる連中は皆、気の良いものばかりだ。

バーの店主もオカマだったがいい人だったし、いろいろと深い話も聞けた。

来ている客の雰囲気も独特で面白かったし、過ごしやすかった。

後、オカマって凄いんだなって思った。

子供が飲めるものなんてジュースしかないけど、俺はここが凄く気に入った。また近いうちにここに来ているだろう。

大人になったらここで飲み明かしたいものだ。

掘られるのはごめんだけど。

ソロモンの月　悪夢？日

個人的にはアナベル・ガトーが最初に出てくるな。
ん？いや、なんでもない。
お盆は普通に両親の実家に帰ってお墓参りをしてきた。
墓に入っている人はあまり覚えてない親族や完全に知らない親族も多いがこう言うのはしっかりしないといけないね。
さて、帰って来て早々だがこの時期、文化祭が行われる。
引っ越す前の所では、文化祭は夏休み明けと同時に開催され、それが終わったらすぐ実力テストだった。
しかし、こっちでは順番は逆で実力テストが終わったら文化祭が行われるらしい。
俺は実力テストの勉強に追われているが、俺たちは文化祭で軍事パレードみたいな物をする事になっている。
その練習をしなくちゃいけなくて忙しい。
戦車にいろいろ飾りをつけたりもするが、人数が足りない所にヘルプで、でなければいけなとこもある。
正直、家でゆっくりなどしてられない。
もうそろそろ夏休みも終わるがあっという間だった。
凄く大変だったし、休んだ記憶があまりない。
補修とかで学校に出る事も多かった。
俺の思ってた夏休みと違う!!
ぽい月　ぽい日
テストは終わり（二重の意味で）、文化祭も終わった。
文化祭は無事成功し、俺たち戦車道を履修している生徒のパレードも大盛況のうちに終わった。
無事に終わって良かったし、新人戦の時期に合わせて部門大会も待っている。
皆んなで優勝できればいいな。
スーパー月　北上様日
部門大会は我ら黒森峰率いる整備チームが整備部門でトップを取った。
整備が好きで普段から尋常じゃない量の整備をこなしているの

だから当然の結果と言えるだろう。
俺はもうちょっと遊んだらいいんじゃないかと思うけど。
まあ、ただ熊本港から市内の繁華街までまあまあ距離があるし、学園艦の上で遊ぶのはいつでもできるでしょと、遊んでいる姿を見たことはない。
そう言う問題ではないのだか…
まあ、優勝できたし、これからは来年に向けての練習になってくる。
なんせ、西住家のお嬢様がくるからな、それに相応しい実力になっていないといけない。
さあて、頑張るぞー。
テストは気にしなくていいっすよね？
バーニング月　ラーブ日
今日、俺は拉致された。
一緒につるんでいた友達の中に、プロチームと親しい人がいるようで、俺を鍛えてやってくれないかと勝手にお願いしたところ、了承して、勝手に計画が進んでいたらしい。
俺は今日も今日とて整備だーと、張り切って倉庫に行こうとしたらドナドナされ、吊るし上げられ、気づいたら山奥だ。
意味が分からない。
なんでも俺はここで3ヶ月整備の他に戦車の操縦や実際の競技者よりもより良い腕になるように訓練するらしい。
え？俺整備士ですよ？
え？競技者がどんな事を感じるのかわからないと完璧な整備なんてできないって？
そんな事ないって、だから返して？はよ返して？
え？無理って？というか学校どうすんの？
は？許可降りてるって？単位もちゃんと取れるようにするって？
いやいや、3ヶ月授業に出なかったらもう勉強は置いてけぼりなんですけど？

え？簡素だけど授業もしてくれるって？
え？いやです。
スマホすら持ってくる暇無かったよ？
今、私物一切無いよ？どうすんの？
チームの物を支給？これ自衛隊のじゃん？
マジ、イヤです。
え？ホントやめて下さいお願いします。
不死鳥の名は月　伊達日
地獄、地獄、この軍隊式の訓練は最悪である。
日記を書く気力が無い。
しかし、年末ぐらいは帰してもらえる事になった。
有り難い。
パンパカ月　パーン日
帰って来たら妹が大変な事になっていた。

Ｓｈｉｆｔ　妹視点
私はいつでも自由気まま

今年から私は中学一年生だ。
引越ししてきてはや一年、この熊本の地にも少しずつ慣れてきた。
ここに引越ししてきた時は小学六年生という中途半端な時期で戸惑ったけど、兄の方が中二からで入りづらい時期の引越しだっただろうし、それに比べれば楽かな。
まあ、兄は上手くやっているようだけど。
それより、この黒森峰中等部に入ったら本格的に戦車道ができるようになる。
私は今まで部門大会砲撃の部で出場するとか、卓上演習などぐらいしか戦車道の活動をできていなかった。
小学生から戦車道をしている県は意外と少ない。
当たり前だ、小学生のスポーツに県も親も車を何十台も買えるような大金を払えるわけがないだろう。
主砲の弾１発でどれほどのお金が吹き飛ぶことか…　考えただけでも恐ろしい。
戦車道がマイナースポーツの一途を辿っているのは単純にお金がかかり過ぎるのが一番の理由だろう。
サッカーなんかと比べると最早雲泥の差と言っても差し支えない。
しかし、ここ黒森峰はお金持ちだ。
特に、西住流で有名らしい西住家はこの学校にかなりの寄付金を払っているらしく、黒森峰は学園艦の中でもかなりの規模の戦車道設備が揃っている。
そのおかげで凄い強豪校らしい。
やっぱりこの世は金なのかね？

おほん、あまりにも夢のない話をした。
取り敢えず、私はこの学校で本格的な戦車道ができる。
砲撃の腕で私の名前は最早かなり有名なはずだが、昨年や今年は西住家のお嬢様が入ったらしいからなぁ、有名だからってそれだけで試合には出して貰えないだろう。まあレギュラー取るのにちょっと影響するぐらいだろうか？
気張らなければ、レギュラー落ちするぞー、私。
私はそんなこんな考えながら、黒森峰の門をくぐった。
??
入学から少し経って、今日は一年生の戦車道に入って来て最初の自己紹介の場だ。
兄のクロトは少し離れた所で私たちを見ている。
どうやら、一見して男子がいなくてガッカリしている様子だ。
早々に整備士の方へ目線を移している。
いい腕をしている人がいないか探しているのだろう。
兄は妙な勘の良さがあるから、一目で分かるのかもしれない。
「赤星小梅です、車長志望です！よろしくお願いします！」
軍隊式のような挨拶で自己紹介は進んでいく。
それも黒森峰のリーダーが放つ圧倒的な覇気ゆえだろう。
それにやられ皆縮こまっている。
…整備チームの先輩方が余りにもフランクに見えるのは気のせいかもしれない。
と、考えているうちに隣の子まで順番が回ってきた。
「に、西住みほです…え、えっと、車長をしていました…よ、よ、よろしくお願いします……」
なんとも自信の無い自己紹介である、こんな時ぐらい堂々としとけば良いのに。
ただ、この子はかなりできる子かもしれない、私の磨かれたシックス・センスがそう囁いている。
マークしておこう。
それよりも、次は私の自己紹介だ。

言うことなどアレしかない!!!
私は声を張り上げる！
「兄様!!」
「おう!!」
「アレをやりましょう!!」
「アレをやるんだな!!」
兄が私の元へ戦車の上から宙返りしながら降りてきて、ポーズを決める。
私もそれに合わせポーズをとりながら掛け声を叫ぶ。
「我ら、鉄(くろがね)兄妹は！」
「戦車の風よ！」
「砲手!!」
「整備!!」
「「全国最強!!」」
「「見よ！鉄(くろがね)は紅く燃えている!!!!」」

バァァァァァァァアアアン!!

そんな効果音が出てきそうなできだ。
演武も決まり最高だ。
私たちの背景に暁に打ち付ける紅い波が見えた気がする程に。
「鉄黒恵(くろがねくろえ)、よろしくぅっ！」
最高だ。
私は今、満ち足りた最高の笑顔で元の位置に戻る。
兄も満足したようで、軽い足取りで定位置に戻っている。
周囲の人間は私たちの東方不敗の挨拶の、余りの出来の良さに驚いてしまったのか、信じられないような物を見る目をしている。
ありえない程の高等な物を見てヒソヒソと話すことしかできないようだ！「最強？」などと語彙力がなくなっている者もいるな！
隣の西住みほなど、余りの素晴らしさに身を震わしているようだ！

やはり、ドモンとマスターアジアの闘いは何者にも通じる最高の決闘だったのだと確信した瞬間だ。
私がそういう事をしていると隊長が話し出す。
「クロト、妹は砲手をしているんだな」
「はい、そうですよ」
「そういうことだ、皆覚えておけ」
あれ？どうやらフォローされてるみたい？
あれだけじゃ私の志望役職とか伝わんなかったかなぁ？
そんな事を考えていたら、すぐに最後の人まで順番が回っていたようだ。
最後だし少しは聞いておきますか。
「逸見エリカ、車長志望です、誰にも負ける気はありません。よろしくお願いします」
へぇ～、なかなか面白い子が……あれ？逸見エリカ？
エリカ？エリカ？カリエ？カリエみつい？みつい？三井？みっちゃん!?炎の男みっちゃん!?
みっちゃんと言えば、航空祭で毎年会ってた家庭環境に難がみられそうと兄が偏見を持ってたあの子！友達ジャン!!
兄も呆然としてエリカを見ている。
「これから新入生はこれからの戦車道の為にガイダンスを行う！十分後に演習場に移動しろ！」
リーダーがそう言い放って演習場の方に移動して、新入生もそれに倣いゾロゾロと移動を始めるが私は混乱から立ち直るれず、そこで棒立ちになっていた。
だが！すぐに頭が現状を理解した。
今やるべき事を私のＩ．Ｑサァァァアンの頭がハジキ出す。
そう、私が今やるべき事は!!
「エリカに抱きつくことだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
「いやっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?」
私は躊躇ないルパンダイブをエリカにかます。
見事に決まったルパンダイブの前に、エリカは反撃の隙もなく私

に組み敷かれる。
　よし！ボーナスタイムだっ！！
「ベロベラベロベロベロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロベロベロベロベロ！！？？」
「うわあああああぁぁぁぁぁぁあああん、何するのよ馬鹿あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！？」
　容赦なくエリカの耳などを舐め尽くす！
「久しぶりエリカぁぁぁぁぁあ！会いたかったよぉぉおおお！！」
「分かった、分かったから離れなぁさあぁぁぁぁぁぁあいっ！！」
　とりあえずその後、三分間ぐらい満足するまでみっちゃんを撫で回した。

電波少女とファーストコンタクト

エリカのボーナスタイムの後、私は久しぶりにエリカと話した。
エリカが戦車道をしていたことは知っていたし、熊本出身なのも知っていたのだが、まさか学校が被るとは思っていなかったから凄く嬉しかった。
兄の方はそこら辺ほとんど知らなかったそうだが。
毎年行っていた航空祭にも行けなかった事を謝ったし、これから一緒に戦車道ができることを喜びあった。
エリカはツンケンしてたけど、私の前ではそんなん効かない、すぐに為すがままにしてあげた。大丈夫、不快なことはしていない、ただ、戦車道とエリカがどれほど好きなのか語っただけなのだから。
戦車道のガイダンスが終わるとその日は終了で、そのまま寮に帰った。
残念ながら私とエリカは同じ寮部屋では無かったが、以外な子と同じ部屋になった。
??
みほ視点
今日、寮部屋が決まりました。本当なら入学式の前に入れるらしいんですけど、内装工事とかの関係で入るのが少し遅れてしまったらしいんです。
それにしても、同じ部屋の子は優しい子ならいいなぁと凄い思います。
特に自己紹介の時、隣の鉄黒恵さんはありえないような自己紹介で周りを圧倒していた、控えめに言っても変な子でした。
ああいう子と同じ部屋になるのは少し勘弁して欲しいです。
主に私が振り回される運命しか見えません。
個性が強すぎるのは冗談抜きで困ります。
そう、考えて過ぎてしまったのが間違いでした。
「オッス、オラクロエ。よろしくな」
私は表情筋が死んでいくのを感じながら、彼女の握手に応じるこ

とになりました。
??
今はとりあえず、荷物の整理をしています。
心の支えと癒しになるボコのグッズをとりあえずたくさん持ってきました。
これをベット周りに置いておけば少しは心が休まるはずです…。
私はベット周りのボコの配置はバッチリ覚えているので、その通りに五分も掛けずに配置します。
その時、なんとなく私は鉄さんがどうしているのか気になったので、チラリと覗いてみると、そこには多種多様なグッズに囲まれながら家庭用ゲーム機を設置していました。
「お?·みほちゃんゲーム興味あるの?」
視線を感じたのか、鉄さんがこっちを見て話しかけてくれました。
「い、いえ、ゲームにはほとんど触ったことなくて…ごめんなさい」
けど、ゲームにはほとんど触った事がないしなにもわかりません。残念ですがお話することはできません。
「ふーん、そう」
鉄さんはそういうと私のベットの方をチラッと見ました。
「ぬいぐるみは随分と好きみたいじゃない」
「そ、そうなんですよ!!ボコはスゴイ可愛くて、あのやられても立ち上がる姿がカッコよくて!!?」
「お、おう、随分と熱くなるんだね」
「あ」
やってしまいました。ほとんど何も知らない人にこんな風に迫ってしまうなんて、変な子だと思われてしまいます!
「まあ、これから嫌でも寝食を共にする仲なんだ。西住の好きな事を知れて良かったよ」
そう言うと、ゲーム機をセットし終わったのか立ち上がりこちらに向き直る。
「だからそんな捨てられた子犬みたいな顔しなくて良いよ。自分の好

きなことぐらいおっぴろげにしてたって良いじゃん」
「く、鉄さん…！」
「クロエでいいよ、私もみほって呼ぶから」
「ハイ！よろしくお願いします！クロエさん！」
クロエさん、とてもいい人だったんですね、私てっきり変な子なんだって誤解してました。
「ク、クロエさん！クロエさんはボコって興味ありますか？」
なら、私の好きなことだって前向きに受け入れてもらえるはずです！
「ウサビッチ」
「へ？」
「ウサビッチ」
「何がですが？」
そう聞くと、クロエさんは肺に思いっきり空気を取り込みます。
そして勢いそのまま声として私にぶつけてきたんです。
「興味のあるものだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ!!」
ヤッパリ変な子だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああ!!

■　変な子視点

ごめんよみほよ。
私はもう夕方にやってる幼児向けアニメは見てないんだ。
今の私のブームはウサビッチ一択なんだから。
だから、最近はキレメネンコとプーチンのめいぐるみも多くなってきた。
ついでにプーチンみたいなダンスを踊れるようにも練習中だ。
にしてもみほよ。
お前は何処からその大量のボコのぬいぐるみを買ってきたんだ？
ぬいぐるみをそれなりの頻度で買う私でもボコのぬいぐるみなんてほとんど見たことないぞ？
がんこちゃんのぬいぐるみは見たことあるのに、ボコはないぐらいなんだぞ？

そもそも、あの作品だって古い方だし、毎回余りにもオチが同じ過ぎてすぐにつまらなくなってしまう。
余りに年齢層が下の幼児向けと言えるアニメだ。はなかっぱより下なのではないだろうか？でんでんザムライは普通に面白かった記憶があるが。
それも、毎回主人公が殴られ立ち上がるストーリーなのだが、これって教育に悪いって親にクレームつけられやしないだろうか？あれ？普通にありえそうだ。
このままじゃボコのいい点を見つけられないような？
不思議だ。みほはなぜあそこまでボコが好きになったのだろうか？
まあ、好きになる経緯など人それぞれなのだから私には何も口出しできないのだか。
まあみほよ、私と同室になったのだお前にもウサビッチ好きになって貰おう。
デュフフフフ、ウサビッチ狂いなっているみほの姿を想像したら笑いがでてくるなぁ。
さあ、みほよ覚悟するがいい!!デュフフフフフッ!!
この笑い方疲れるなぁ。

ブルッ！な、何かとんでもない寒気がします!!

電波少女と他二人

あの自己紹介以降、私は主に三人で動いている。
エリカとみほと私だ。
エリカはエリカで他に友達も多いらしいが、何だかんだ言って付き合ってくれている。
多分、初手ボーナスタイムが良い方向に効いてくれたのだろう。
みほはその人見知りが発動しまくってあんまり仲の良い友達ができなかったらしい。
みほに引かれてしまった私なのだが、結局みほは私といる以外居場所もないようでいつも一緒に行動している。グハハハ、まるで私はいたいけな少女の居場所を奪った変態おじさんのようだな。これから、R18指定のような事でも起こるのだろうか？いや、やっぱり百合じゃないんでいいです。

「今日は初めての模擬戦ですね、クロエさん」
みほが朝食を食べながらこちらに話しかけてくる。
最初はあまり話しかけては来なかったが、こちらこらベタベタと接するうちに結構話しかけてきてくれる様になった。
「みほ、あんたみたいな根性無しが車長なんて務まるの？」
対して、ツンツンしている銀髪のお姫様、エリカ。私のボーナスキャラだ。
「まあ、私とみほは車長だから同じ戦車に乗る事は無いだろうけど、クロエ、アンタは私とみほどっちの戦車に乗るの？」
「エリカのお股の上」
「アンタの性癖の話をしてるんじゃないわよ！」
ゴッ、そんな音がするような拳骨が私の頭に着弾した。
ひどいなー、そんな強く殴らなくても良いじゃないか。
「なら、みほといる時にそんな話しないで」
あら？”みほ”といる時にってぇ～、二人っきりの時ならナニして

もいいの～？
「え？クロエとエリカさんってそういう関係…」
　ゴッ!!大口径砲弾、着弾今！着弾点、クロエの頭部！
「違うわよ！みほ変な勘違いしないでちょうだい、エリカが変な子だってのは身をもって体験してるでしょ？」
「あ、はい、そうですね」
　二人共酷いな～、えっと、私はみほの方の戦車に乗ることになってたよ。
「チッ、取られたわね」
「そ、そんなに悔しがらなくても良くないですか？」
「え、あんた、こいつの戦績知らないの？」
「え？クロエさんって凄い戦績してるんですか？」
「はあ、同室なのにそんな事も知らないなんて、なんでこんなヤツがそんな腕してるのかしらね」
「え、え、なんのことですか？」
「みほ、それぐらい自分で調べなさいよ。後、とりあえず、模擬戦ではあんたには負けないから」
「ひっ」
　そんな強めに言っちゃってー、ツンケンしてる割にはみほのこと呼び捨てだよねー。
「クロエはどうでもいい事言わない！それにみほにはしっかりした人がついて無いと心配でしょ？」
　なら私はしっかりしてないと？
「放置してたら暴走しそうなアンタがしっかり者？冗談も程々にしなさい」
　へいへい、よく私の事をお分かりで、トッツァン
「私は銭形じゃ無いわよ、あと何？その発音？ツッコミ所多いわね」
　ボケてないと死んでしまう呪いにかかってるもので。
「まあ、いいわツッコミも疲れるから、そろそろ時間だから行くわね、二人も遅れないようにしなさいよ」
　私はもう、食べ終わってから、平気だよ～

「え!?クロエさんもう食べ終わってるんですか！私もすぐ食べますから待っててください！」
オ～ケ～
「はあ、本当にこの二人大丈夫かしら」
??
「そんな事知りませんでした、なんで言ってくれなかったんですか！クロエさん！」
「え～、言う必要も無いと思ってたから～、言わなかった」
「いや、砲撃の全国大会で優勝経験があるなら言ってください！後、昨日からその伸びてる語尾はなんなんですか!?」
「ん？いい味出してるでしょ？」
「鬱陶しさに拍車がかかるだけです！」
「ズケズケ言うようになったね～」
「誰のせいだと思ってるんですか…」
みほは解せぬといった顔でグヌヌとしている、なんだい？悩みがあるならおじさんが聞いてあげよう。
「ほら、二人共話してないでさっさと持ち場についてくんない？上の学年との模擬戦とは言えみすみすやられたくないし」
同乗者の子がせかしてくる。
「オッケー、装填よろしくね、みほ、指示だして」
「はい、分かりました、けどクロエさん黙ってたこと許してませんからね？皆さん持ち場についてください」
「おー、怖い怖い」
「あなた、口だけじゃないの？」
装填者の子が言ってくる。
「バカ、こういうのは様式美っていうんだよ」
「アンタ、アニメの見過ぎよ」
あら、なんか冷たく返された。

う～ん、流石にうざったらしかったかな？
まあ、いいや。こうゆうのはスーパープレーで返すものだ。
「戦車、前進してください！」
どうやら始まったみたいだ。
さて、気合い入れていきますか。

??

「いやぁ～！ハッハー、負けた負けた～!!」
「クロエ、負けたのにそんな嬉しそうにしないでちょうだい」
エリカがこちらを凄みながら言ってくる。
「流石に相手とこちらとの連携力の差が開きすぎていました。そこもちゃんと考慮してなきゃいけなかったのに」
みほがしょぼ～ん（・ω・）とした顔をしながら話をきりだす。
「それは仕方ないわよ、上手な連携は数多くの練習と経験がもたらすものなんだから。それよりも、殲滅戦でまさか後一両のところまで追い詰めるなんて、そっちの方を誇ればいいじゃない」
「相手は手を抜いてたみたいだけどね」
「クロエ、それは言わなくていい」
うへぇ、またエリカに怒られちった。
「いえ、いけたはずなんです。クロエさん程の砲撃の精度がある人を上手く使えれば倒せたはずなんです」
「みほは戦車道になると人が変わったように負けず嫌いになるよね」
「ならクロエさんは負けて悔しくないんですか？」
「何言ってんの？次当たったら速攻で叩き潰してやるわよ」
「結局あんたも負けず嫌いってことじゃない」
そういうことだ、私が強い事は確実だからな。一人でもなんとでもできるさ。
「クロエ、あんたいくら良いスコアを叩き出したからって一人でなんでもできるなんで思ったり、勘違いしたらダメよ」

「？」
　エリカは何を言を言いたいんだろう？私はその言葉の意味がよくわからなかった。
「でも、クロエの速射は羨ましいわね。静止射撃の命中率もそうだけど、止まってから撃つまでが速いわよね」
「はい、体感ではまだ揺れているのに、確実に当ててきますから、確かな実力を感じますね」
「やだなぁ、二人共、まだまだ褒めてよぉ～」
「まあ、今回は２０両中８両撃破でしょ？まだ褒めてあげても良い戦績ね」
「ええ、上の学年にここまで奮闘できるのはスゴイことです」
　二人共まだまだ褒めてくれるようだ。やぁ～、照れますなぁ。
「最後の最後で隊長車に遭遇してしまったことが運の尽きだったわね。まほ隊長の車両にやられたんでしょ？」
　エリカがそうみほに聞いてくる。
　それを聞かれたみほは嬉しそうに
「はい！お姉ちゃんの戦車にやられたんですよ、いくらこちらが命中率が高いとは言え、回避の仕方も上手くてこちらの攻め方も読まれてました、お姉ちゃんは本当にすごいんですよ！」
　エリカはみほのお姉ちゃん持ち上げに若干引いていそうだ、と思ったのだが
「そうよ！何言ってるのよ！相手はあの西住まほよ！あんた程度じゃあの人に勝てる訳ないわ！」
　エリカも嬉しそうに誇らしそうに西住まほを持ち上げている。
　嗚呼、ここの二人は西住まほファンだったのか。
　私はこの話にはついていけないな。
「私、お姉ちゃんに勝てたらいいなぁ」
「あんたじゃ一生無理よ」
　私もあの人のナイスボディに勝てる日が来たらいいなぁ。
　ボンキュボン、特に尻のボンはなかなかだとお見それした。
　みほも特に胸の方にその遺伝が集中している。中学生だという

のにけしからん大きさだ。
「クロエ、また変な事考えてない？」
「考えてないよ～」
「嘘つけ」
　私の顔がエリカの手によって強引に横に向けられる。
「あんたの視線が私の胸と腰を行き来してんのよ」
「うん、なかなかいいスタイルだと」
「それでも視線が下世話すぎるのよ！」
　痛い痛い、やめてエリカ、折れる折れる。
「明日からは練習を密にやっていかなければいけませんね」
「そうね、また負けるのは癪に触るわ」
「ええ、頑張りましょう、エリカさん」
「あんたの方が頑張らないといけないんじゃないの？みほ」
　二人はガシッと握手を交わす。
　ついでに私も混ぜて欲しいな～、無視しないで欲しいな～。

　終始、こんなノリで今日の夜は更けていった。

電波少女と夏休み前

最近、兄の気分があまり良くない。
エリカとの仲がギクシャクしてたらしいけど、航空祭に来れなかったことをちゃんと謝って関係は良くなったらしい。
未だにエリカのクロト兄に向ける視線は鋭いままだけど。
気分が良くないのは単純に忙し過ぎるのと、戦車整備の担当で私たちの乗る戦車を担当できなかったことらしい。けど、クロト兄は隊長車の整備担当だからそっちの方がすごいと思うんだけどなぁ。
なんでも、私たちの考えた最強の戦車作戦という物を実行しているらしく、整備チームはいつにも増して忙しそうにしている。その中でも整備チームのリーダーを任されているクロト兄は特に忙しそうだ。
隊長ともずっとどう整備するか話込んでる事が多いし、隊長車以外のとこにもヘルプに出ることが多いと聞く。
自ら仕事を増やしていく整備チームには脱帽するしかない。
まあ、それであまり寝れてないクロト兄はピリピリしてるし、気分も悪いように見えるということだ。
そんな気分が悪いクロト兄だが、最近更に気分を害している連中が沸いてるらしい。なんでもまほ様親衛隊とかなんとか。
私が見た感じでは結構キャラの濃いメンツが集まっているストーカー集団に近かった。
クロト兄はそんな危険な集団を見逃す訳にもいかないから対処しなくちゃいけないらしくて頭を抱えている。
戦車道でも忙しいのに、そんな雑用までしなきゃいけないなんて…そりゃ成績もとんでもないことになる訳だ。ご愁傷様である。
そんなことよりも、私とみほとエリカは無事にスタメン入りだ。
予想通りである。
みほは一度戦車に乗れば鬼神の如き指揮をとるし、エリカはエリカで堅実ながら西住流を体現するような指揮をとれる。車長として

の実力は二人とも充分な程ある。
私は私単品でも決定力は言うまでもなく天元突破だが、みほが駆る戦車に乗ればもはや超絶天元突破天地も海もパッカーンな最強美少女クロエちゃんが爆誕するのだ。
ふふーん、初弾以外ならほとんど着弾されられる超感覚型のクロエちゃんは経験値が圧倒的に高いので計算しなくても感覚的に当てられるのだ。だから停止射撃において他を圧倒するスピードで狙いを定められるのだ。
ヤベーだろ？すげーだろ？にゃはははは!!褒めるがよい！我を褒め称えるがよい!!そうだぁ、もちあげろ～、もちあげまくれ～!!

そんな感じであっという間に夏休みになった。
ちょびっとだけ有った事を言うと、高校の祝賀会ではエリカとクロト兄の仲がさらに改善されて結構仲良くなってたり、クロト兄がみほに私の暴走を止めて欲しいと頼んでで、クロエさんとは雲台の差ですねとか冷たい視線を向けてきたり、毎年恒例らしいクロト兄を拉致しての討論会があったらしい。あれを初めて見たのだが、毎年あんな事になってたのかと驚嘆した。みほも頬を引きつらせてひいていた。
仕方がない、いくら捕まったら最悪な目にあうと分かっていても、兄も最低な性格全開で逃げたらひかれるのは必然である、という感じだった。
その他のイベントなどは全カットである。
■

夏休み前、それは緊張の夏、私たちはそう言っても過言ではなかった。
何故なら、中学戦車道の全国大会は夏休みではなく、夏休み中に実施されるのである。
高校は他の部活より早く全国大会、中学生は他の部活より後。
こう他の部活とずらしているのは意図的だ。

戦車道をするにあたってなにより必要なのは金である。
履修者から集金するのにも限界がある。
だから、集客して少額ではあるが入場料や出店などで稼がないといけないのである。
高校では運営側の出店とアンツィオ高校の出店が毎回どちらが客を呼べるがバリバリの戦いを繰り広げているらしい。
意味不明な戦いである。
まあ、話を戻すが、まだ大会が終わってない私たちは毎日過酷な練習をこなしている。
マニュアル戦術がデフォの西住流ではあるが、それも高水準になれば強力な戦力になる。そのかわり、個の強さがあまり目立たなくはなるが。
まあ、基本的に戦車道も数の多い方が勝つのだ。
そう、戦いは数だよ！兄貴!!
まったくその通りである。
だから、私はもっと前にでてガンガン戦いたいのだが、周りと合わせた小隊編成などが鉄板なのでどうしようもないのだ。

「クロエさんはもっと有効的に活用できるはずなのに」
みほが満足のいかないような顔でぼやく。
「仕方ないさ、秘密兵器は温存しなきゃいけないんだから。それに大丈夫だよ、いざとなったらゴーサインがでるよ」
「お姉ちゃんの戦術でそこまでボロがでるでしょうか？」
「まほ隊長の西住流だからなぁ、ボロほとんどないかぁ…」
「全くないです！訂正してくださいクロエさん」
「本当にシスコンだよなぁ、みほは」
「シ、シスコンって！どうゆう事ですか!?クロエさん！」
「そのまんまさ」
そう吐き捨ててから自室に自分が持ってきて置いておいたちゃぶ台に置かれたココアを取り、グイッと飲み干す。チビチビ飲むのは

性に合わない。
まあ、私も納得いかないが、黒森峰はチームプレーを尊重している。私のような個人の実力が突出した者を最大限に活かすわけではない。
エリカもみほもまほ様好き好きなので反抗しても仲間になってくれない……
なので、私は悔しみを押し殺しながらと耐え忍ぶしかない……くっ！
「多分クロエさんの実力を活かすのなら、遊撃ですね。上手く乱戦に持ち込むことができれば最大源の実力を発揮できると思います」
「私はロングアレンジも得意だけど？」
「そうですね、なら単独の敵を相手取るとかも得意かもしれません。どのレンジにも対応してきて、停止射撃のタイミングも早い。相手からしたら相当の脅威ですよね」
「あとみほ、私はタイマンは得意だけど遊撃はどうかなって思うよ？砲撃の大会と遊撃での撃ち方とは感覚が全く違う、目まぐるしく移動しながらの攻撃に関しては経験値が少ないね」
「そうですか」
みほが二段ベットの一段目から顔を出してションボリしている。
ちなみに、みほが一段目が良いと言い出したんだからね？強引に私が二段目に行った訳じゃないよ？ボコが落ちると大変だからって一段目が良いって言い出したんだからね？
「まあ、みほが指示を出せば百人力さ。遊撃が得意でない私でもバンバン敵を撃破してあげようぞ！」
「クロエさん…」
みほが感動したような顔でこっちを見る。
「そうですよね、クロエさんもなんだかんだ言って練習には真面目に参加してますから、遊撃時の練習もバリバリやってくれますよね？」
「へ？みほ？」
「大丈夫ですよ、ほんのちょっとみっちりと練習するだけですから」
「ハハハ、お手柔らかにね？」

そうきたか、マジでそうきたか。
ただでさえ練習量多いのにもっと増やす傾向でいきますかぁ。
みほの事だからオーバーワークにならないように調整はしてくれるだろうけど、その分中身がとんでもないものになりかねないからなぁ。怖いなぁ。結構怖いなぁ。
「さて、クロエさん、明日の予定も決まった事ですし、寝支度を始めましょう！」
「え！明日からすんの？」
「はい！練習メニューも今考えました」
「え？マジで言ってる？」
「マジですよ？おおマジです！」
「はは、ほんとに強かなになったなぁ」
「クロエさん、誰のせいだと思ってるんですか？」
みほは笑みを浮かべながらもそう言う。
みほがこんなに強かになったのは私のせいだろう、そうだろう。
まあ、練習するのも仕方ない、私が超絶なんでもこなせるスーパー天使クロエちゃんになるために必要な事なのだから。
「みほ」
「なんですか？クロエさん」
「大会、絶対優勝するよ」
「クロエさん…はい！絶対優勝しましょう！」
私たちは止まらない、強くなることを戸惑わない。
これが私の生きがいだから、これが物凄く楽しいから。
明日も戦車道をするんだ
さて、明日も元気に戦車道するために早寝しなければ。
健康の基本は早寝早起きだからね。

こうして私は、とりあえずマグカップを洗いにキッチンの方へ行くのだった。
夜遅くに飲もうと思い立つんじゃなかった……歯ブラシもしないと……

電波少女は堕ちていく

私たちの夏が終わった。
別に負けて終わった訳じゃない。
圧倒的な実力で私たち黒森峰は優勝した。
ただ、そこには私の想像していたような血湧き肉躍るような戦いが無かっただけだ。
優勝したことは嬉しいけど、砲撃大会で頂点を勝ち取った時のような興奮は沸き起こる事は無かった。

それから、私の中学生最初の一年は瞬く間に過ぎていった。
文化祭や、体育祭は楽しかった記憶がある。
テストはみほやエリカに教えて貰って兄と似ても似つかない程の高得点をとった。
エリカになんでそんなに努力できるのかと聞かれた事もあったが、戦車道が好きだからと答えた。なんだかんだ戦車道は私の続けてきた物の中では一番長い物だ。それだけ戦車道が好きだし、やってて楽しい。最近は少しつまらないけど。
戦車道はいつものようにチームとしての練習をこなして、自身の砲撃の精度を上げていくだけだ。
それもほとんど必要ないのだが。

そんな感じで私の中では不完全燃焼の一年間だった。
兄は高校に入り、私たちは中学二年生になった。
まほ隊長の西住流はその後も練習形態を変える訳でもなく、そのまま続いていった。
兄は充実した生活を送っていたようだが、私は唯一砲撃の練習をしている時が楽しかった。
試合で使う場面など全くないのに、みほと延々とできないことをできるようにしようとする努力は楽しかった。
高校の祝賀会でも兄貴もぐるぐる巻きにされて吊るされていっ

た時は不覚にも笑ってしまった。
中学二年生の生活も自身の力を戦車道で活かすことができないという点を除いては楽しかった年だった。
エリカと兄はほとんど仲直りして、みほにオタク文化を教え込んで、エリカと夜中までゲームしたり、美容について盛り上がったり、二人でみほをおめかししたりした。
そんな何気ない日常って感じだったんだ。
けど、その日常が歪む時っていうのはある日突然訪れるものなんだ。それを回避することなんて、誰にだってできやしないんだ。
例え地獄を見るのだとしても、その運命は受け入れるしかないんだ。

??

ここは、何処だろう？
意識が覚醒してくるとともにそんな考えが頭をよぎる。
「おい！#$%いつまで寝てる！早く起きて操縦桿を握れ！敵が来たぞ！」
ギャラギャラと戦車が動く音ともに後ろから低い男の声がする。
「すみません！車長殿！」
私のすぐ近くでまた男の声がする。
いや、違う、これは……
「敵、８時の方向！数６です！」
「クソ！こちらは連戦でろくに整備もできてないんだぞ！味方の援護も期待できないというのに……！」
車長の男が冷たい鉄の塊を叩く。
いや違う、戦車のハッチを叩いんたんだ。
私は気づけば何故か戦車に乗っていた。
「#@$€、当てれるか？」
「ハイ！車長殿、射程圏内であります！」
「よし、合図を共に停止、再度合図を出したら右前方の敵を撃て」

「了解」
その言葉と共に車両の中に緊張が走る。
戦車に乗っている者全員が生唾を飲み込み、腕に力が入る。
ピリピリとした緊張が走り、自身の震えを誤魔化そうと興奮してくるのが分かる。目が血走っていくのが分かる。
けど、そのどれもが異常なことで、普段の戦車道とはかけ離れている事を感じる。その事に意味のわからない恐怖を感じた。
何分、何十分経っただろう？いや、もしかしたら数十秒しか経ってないのかもしれない。そう錯覚してしまう程の重圧の中、私、いや彼は操縦桿を強く握り引金に指をかける。
冷たく硬いはずの金属が、自分の体温で熱くなり、これから起こる事に対してあまりにも脆いように感じた。
狙いを定めている敵の姿がどんどん大きくなる。
敵はまだこちらに気づいてないようだ。明後日の方向を向いている。
「Ｈａｌｔ（停止）」
車長の合図と共に戦車が静かに停止する。
敵戦車の砲塔がゆっくりと回転している。
あれが完全に向こう側を向いた時に合図をだすのだろう。
彼は緊張でうまく動かない指にいつでも撃てるよう力を込める。
その瞬間、車長が息を吸う音が聞こえた。
「Ｆｅｕｅｒ（撃て）!!」
その合図と共に彼は引金を引いた。
ズドンッッッ!!
いつも乗っている戦車の砲撃音より、より重く強く、恐ろしい砲撃音が響いた。
それと共に彼が叫ぶ。
「一両撃破！装填急げ！」
「車両もう1発撃ってから前進しろ！左方向に射線を切るように動け！砲手！こちらにより早く砲塔を回せる相手から撃破しろ！」
「了解！」

横で弾が装填され終わった音が聞こえた。
彼は即座に引金を引いた。
腹に響く重々しい音と共に敵車両が煙を吹いた。
「2両撃破！」
車長も最早こちらを気にする余裕はない。
戦車が急発進する。
彼はその衝撃を気にする余裕もなく次の相手に狙いを定める。
敵の戦車も攻撃された事にやっと気づいたのか戦車が動きだす。
弱点である側面を晒さないように、動き始める。
「3秒したら戦車を止めろ！停止射撃だ！確実に仕留めろよ！」
車長の怒声が響く。
その声に腕が震えた。
3…2…1
戦車が急停車する。
彼は砲塔の向きを敵の方向に合わせる。
「Ｆｅｕｅｒ!!」
車長のその声に反応し、彼は反射的に引金を引く。
砲撃の音が響く。
しかし、その弾は致命傷なりえなかった。
有効打ではあったが、撃破するには一歩届かない。
なぜなら、敵戦車は完全にこちらへ砲塔を向けたからだ。
撃たれた弾は前面装甲を凹ませるだけだ。
「Ｖ前ｏｒＶ前ｏｒ進!!」
車長がまた叫ぶ。
しかしそれはさっきの何倍も鬼気迫っている声だ。
「距離を保ちつつ進め！すぐ近くに障害物がある！そこで射線を切れ！」
怒声と砲撃音が聞こえる。
近くで体を震わす程の音が聞こえる。
砲弾が近くに着弾したんだ。
戦車道で感じる衝撃なんかとは比べ物にならない程恐ろしく感

じる。
相手の対応も予想以上に早い。
敵の攻撃に恐ろしい程の殺意を感じる。
戦車の装甲を通しているのに、敵の怒気を間近で感じるか
わからない、こんな感情…向けられたことなんてない…！
敵の砲撃の雨を縫って岩に身を隠す。
岩に砲撃の当たる音が何発かし、不意に止まった。
「右から車体を半分だけ出せ、出したらすぐ引っ込めてもう一度だせ、
そしたらすぐに砲撃だ」
「了解」
車長と付き合いの長い操縦手だ。
車長の思い通りに動かすだろう。
戦車が動きだす。
岩に身を隠しているだけだ、すぐに車体が出る。
出た、彼はすぐさま敵を確認する。
敵の砲塔がこちらを向いている。
それを確認した瞬間戦車が岩陰に身を隠す。
砲弾が飛んでくる。
着弾と同時に舞い上がった土煙りが戦車にパラパラと降りかかる。
そんな事を気にしてはいられない。
岩から車体がまた出る。
敵戦車は先程こちらに何発も砲弾を撃ってきた。
装填までに時間がかかるだろう。
見えている視界が岩から敵戦車の蔓延る荒野に移り変わった時、
彼は先程仕留め損なった敵に照準を定める。
停止、引金に指をかけた、引いた。
腹の底に響く重低音が響いた。
何かの爆発音と共に何かが失われた音を聴いた。
それを確認してすぐに戦車が岩陰に身を隠す。
「次、後退して岩の反対側から砲撃しろ！」

車長の指示が飛ぶ。
すぐさま戦車が動き始めた。
装填手もすぐ次の弾を込め始める。
反対側に出た。
装填が完了した音も聞いた。
後は敵に狙いを定めるだけ。
けど、私はそこで強い違和感を感じた。
全車両が私たちが砲撃していた地点に向かって前進している。
「馬鹿なヤツラだ。全車両まとまって攻めてくるなんて、挟み撃ちにでもすればよかったものの！」
違う、それは罠だ！
私の本能が全力で警鐘を鳴らす、けど、この体は私のものじゃない、この体は名も知らない彼の物だ。
「おい！馬鹿！岩陰を狙え！早く！戦車も全力後退しろっ!!」
車長がいきなり操縦手の背中を蹴りまくる、私に鬼気迫りながらも青ざめた顔で指示を出してくる。
彼も私もその意味がら分からなくて、でも何かがヤバイと察して、岩陰に照準を合わせる。
それと同時に理解した。
車長がそこまで焦る意味が。
「総員、衝撃に備えろおおおおおお!!!?」
車長の怒声が聴覚を支配する中で、私の視界の端には、パンツァーファーストを構え、修羅の顔をした敵兵の姿が映った。
何故我が軍の武器を？
そんな疑問も刹那に消えた。
引金を咄嗟に引いた。
咄嗟に引けたのは奇跡としか言いようがない。
しかし、その奇跡は最良の結果をもたらしてはくれなかった。
無慈悲にもパンツァーファーストは発射された。
衝撃、轟音、叫び声、全てが混ざりに混ざって分からなくなった。
でも、何よりも分からないのは瞼の裏にこびりついてしまった、

あの男の深淵が見えない程に、殺意の篭った目だ。
その瞬間、私の感情は爆発した。
分からない、分からない、分からない！なんでそんな目をする！何故そんな目ができる！なんなんだ！なんなんだ！私が何をしたっていうんだ！なんでこんな目に合わなきゃいけないんだ！戻せ！こんな殺意と狂いきった感情が支配する場所なんかいたくない!!
叫ぶ、私は叫ぶ、けど、現実は止まらない、この狂いきった夢は一向に止まる気配がない。
ハッ！夢!!?そうだ、これは夢だ！夢なんだ!!そう！これは夢なんだ！だから、終われ！早く！終われ！
願う！願う！願う！
けど、それは叶えられることのない願いだった。
衝撃、戦車の中がシェイクされる。
体制が不安定だった装填手が頭をぶつけて失神する。
通信手も気を失った。
パンツァーファーストを持っていた敵は爆散した。
けど、これで危機が去った訳ではない。
むしろ、これからだ。
「車長！履帯が切れました!!」
「ファック！ファック！ファック!!」
車長が絶望的な状況で叫ぶ。
「操縦手！お前は弾を装填しろ！暇があったら伸びてるやつを叩き起こせ！砲手！早く砲塔を回転させろ!!」
「やってます!!」
けど砲塔にもダメージがあって、回転速度が落ちている。
絶望的な状況だ。
「敵戦車来るぞ!!」
車長が絶望への言葉を叫ぶ。
その瞬間、戦車が揺れた。
鼓膜が破れそうな程の着弾音が脳を揺らす。
しかし、砲塔が完全に敵に向いた。

「死ね!!クソどもが!!?」
彼は自然とそう叫んでいた。
車長の金切り声はいつのまにか聞こえなくなっていた。
彼は引金を引いた。
敵を一両爆破した。
敵戦車が肉薄してくる。
そのまま、こちらに体当たりしてくる。
二両目も体当たりしてくる。
戦車がひっくりかえる。
履帯はキレた、装填手は気絶した、操縦手も気を失った。
通信手も頼れる車長の声も聞こえない。
弾が装填されないから砲手は何もできずにただ無力だ。
それでも彼は狙い続けた、引金を引き続けた。
「来るなっ!来るなっ!!来るなっ!!?」
カチャン、カチャン、カチャン。
虚しい音が響く。
頼もしい砲撃音は聞こえることはない。
不意に砲塔が動く音が聞こえた。
コンッと砲口が車体の下面にぶつかった。
「嫌だっ!嫌だっ!死にたくない!死にたくない!!」
そうだ!死にたくない!死にたくない!
死ぬのは嫌だ!痛いのは嫌だっ!!こんな悪意を向けられるのは嫌だっ!!?
私は悪いことなんかしてないっ!殺さないでっ!殺さないでっ!

不意に、死の音を感じた。
足元から熱量を感じた。
砲撃の音だ。
私が聞き慣れたはずなのに、全く違う別の音に聞こえる。
そうか

戦車はスポーツをするものでも、楽しむ物でもない。
人を殺す物なんだ。
人を簡単に殺せる道具なんだ。
誰かに、恐怖と絶望を与え、人を狂気に陥れる死の象徴なんだ。

怖い。
怖い。
怖い。

私は今まで何を扱ってきたんだろう？
私はなんの技術を磨いてきたんだろう？
私は何をしたくてこんな事をやっていたんだろう？

漠然とした恐怖が、自身のやってきた事への恐怖が、私を覆い尽くして支配する。
ああ、そうか、死ぬんだ。

そう理解した時、灼熱の赤が私の視界を染め上げた。
私は、悪意の炎に焼かれて、悶え苦しんで、絶望の中で、死んだんだ。

??

私は、ベットの上で、涙を流しながら、目を覚ました。
ベットの、柔らかい感触が、ここが戦車の中ではないと物語っている。
涙が頬を流れる感触が、私が生きている事を証明する。
下段のベットで寝ているみほの吐息が、ここに悪意がない事を理解した。

けど、私はもう、

戦車なんて、見たくなかった。

電波少女と決定打

あの悪夢から3日経った。
少し寝込んでしまったが、私はなんとか戦車に乗っている。
あの悪夢を見た後、戦車なんて見たくもなかったが今まで私が人生の多くを積み重ねてきたのが戦車道だ。
私の人生の主柱には戦車道というものが突き刺さっている。
悪夢を見たからって今更やめる訳にはいかない。
それに、みほやエリカもいるんだ。
二人の為にもやめられない。
大丈夫、私は世界で活躍する最上位の砲手だ。
戦車なんて、怖くないんだ。

??

どうやら今日の練習は模擬戦をするらしい。
仲間内での練習だ。
「クロエさん、大丈夫ですか？顔色が悪いですけど？」
「ああ、大丈夫だよ、問題ない」
なんてことはない、少し手が震えただけだ。
いつもの私だ。
「しゃんとしてくれよ？うちらの稼ぎ頭なんだから」
「はは、しゃんとするよ」
うちの装填手ちゃんも私の事を心配してくれる。
そんなに顔色悪いかなぁ？
「大丈夫なようでしたらそろそろ始めます。皆さん持ち場について下さい」
「「「了解！」」」
あの車長のような怒声が飛ぶ訳ではない。
みほの持つ優しい声だ。
その声にどこかホッとする。

多分、いつもの戦車道に戻ってきたからだろう。
「戦車、前進!!」
その声と共に、戦車が動き出す。
聴き慣れた、戦車の駆動音。
私の耳を包み込むが、大丈夫だ、恐怖は感じない。
「で?車長、どこに向かいますか?」
操縦手の子がみほに問う。
「そうですね、荒野に向かって下さい」
??

荒野……、そういえば悪夢で見た場所も荒野だった。
けど、夢で見た荒野と学園艦の上に存在している荒野が似通っている訳はない。
こんな所であんな事は起きない。
当たり前の事を心の中で再確認する。
「予想では、敵はこの荒野を通るはずです。しかし、周辺に高台もありません。なので、この岩場が密集する地点で待ち伏せをしようと思います。索敵の一両を除いて全員岩場で待ち伏せに適した場所を探して下さい」
どうやら待ち伏せらしい。
確実性を求めた作戦だ。
各自、隠れるのに適した地点へ移動を開始する。
こちらも、すぐに移動した。
数分後、偵察をしている味方から無線が入った。
『敵車両確認しました。数は4、全車両で移動しています』
「了解しました。引き続きそこで偵察を続けて下さい」
『了解です』
どうやらみほの予想は的中したらしい。
敵戦車は荒野を突っ切っているらしい。
「で?こっちは3両で相手するのかい?」
「はい、こちらは3両で相手します。待ち伏せという有利な状況に加

え、クロエさんの砲撃精度があればやれるはずです」
「ま、当たり前だね」
「初撃は外す確率の方が高いのに偉ぶらないで下さい」
「みほ、流石に辛辣すぎない？」
　地味に傷つくんですけど～～！
　確かに初撃は外しやすいけどさぁ、そんな言うほどかなぁ。
「相手は岩場を通るはずです、それを側面から攻撃します。クロエさん、十分に接近しますから外さないでくださいね？」
「オーケー、みほは心配性なんだよ」
「なら心配かけさせないでください」
　私の実力を信頼してくれているくせに、そんな事言って～。
　そんなに私の何が心配なのかなぁ？
　まあ、いいや。分かんないものは分かんないし。
『みほさん！どうやら警戒されているようです！敵索敵戦車、岩場を回り込んできます』
「隠れるのは間に合いそうですか？」
『いえ、スペック的にキツイかと』
「分かりました、報告ありがとうございます」
　おっと、どうやら少し予想外の事が起きたらしい。
「クロエさん、砲塔を反対側に動かして下さい。敵索敵係を撃破します」
「オッケー」
　本当は完全に岩場に誘い込んで敵を一気に叩きたかったんだろうけど、このままじゃ全車両逃してしまうかもしれないから、とりあえずこちらの状況を正確に知られる前に偵察車を撃破するつもりだろう。
「クロエさん、軽戦車にあてられますか？」
「ヨユー」
「では、確実に撃破してくださいよ、相手は右方向のあの岩から来ます」
「了解」

指を引き金に引っ掛け、狙いを定める。
感覚が研ぎ澄まされていくのを感じる。
どのタイミングで来ても、外さない程に集中が高まってくる。
「クロエさん……来ますっ！」
その声と共に、軽戦車が岩から車体を出す。
私は軽戦車が視界に入ると共に引金を引く。
ズトンッ
少し軽い砲撃音が響くと共に軽戦車が白旗をあげる。
「初弾っ…命中！」
「今日は冴えてますね、クロエさん！」
ああ、そうだ！
私のフィールドはここなんだ！
私がいるべき場所はここなんだ！
他のどこでもない、戦車の中だ！
モヤモヤと掛かって思考の邪魔をしていた霧が晴れていく。
私の中に巣食っていた恐怖が吹き飛んでいく。
いつもの、一人で何もかもをひっくり返せる、最強の私が帰ってきたんだ！
思考が冴え渡っていく。
今ならどんな敵が来ても私には敵わない。
そんな高揚感が力となって湧き出てくる。
「敵はまだこちらの数を把握できていません！私たちが囮となって相手を引きつけてるうちに撃破してください！」
みほがチームに指示を出す。
戦車が動きだす。
岩陰からその身を晒す。
晒した瞬間、敵戦車3両ともこちらを向く。
いきなり、偵察していた味方が撃墜されたのだ、他の敵を警戒して一箇所に集中しない方がいいのに、見事に団子状態になっている。
「今です！」
みほの声と共に、左右に展開していた仲間の戦車が火を吹いた。

けど、白旗は一つしかあがらない。
相手の戦車も砲撃してきたが、上手くかわした。
「クロエさん、撃って下さい！」
「あいよ！」
返事を返す前には引金を引いていた。
砲塔から爆音が轟く。
敵戦車履帯に当たったらしい。
「私たちは突撃します、援護をお願いします！戦車、前進！」
その声と共に戦車が前進しだす。
まだ動ける敵戦車は逃亡を開始する。
履帯の切れた戦車が悪足掻きに砲撃してくるが、それを避ける。
ヘイトを買った履帯の切れた戦車は味方に蜂の巣にされていた。
私たちはそれを無視し全力後退を始めた戦車の追撃を行う。
「後ろにピッタリと張り付いて下さい！相手は後部装甲を晒しています！当てれば勝ちです！こちらは前面装甲だけ晒しておけば何発かは耐えられます！」
みほの指示がとび、戦車がピッタリと敵戦車の後ろを走行する。
そのまま、二台の戦車は側面が崖になっている砂利道でチェイスを始める。
「クロエさん！当ててくださいね！」
「あー、分かってます、分かってます、なんかみほやっぱ今日私に厳しくない？」
「大事な場面です！力みもしますよ！」
「あー、確かに」
妙な納得をしながら、狙いを定める。
流石の私も移動攻撃なんてできないが、そんなの高校生の中にもいない。
でも、こういう直線的な走行をしている相手なら、走っててても当てられる！
装填は終わってる、後は引金を引くだけだ。
相手の砲塔は完全にこちらを向いている。

けど、戦車の前面装甲なら何発かは耐えてくれる。
ズトンッ！
相手の戦車が火を噴く。
砂煙もまう。
どうやら、大分下部分を狙って撃ったらしい。
けど、そんなの効かない。
相手が砂煙に隠れきる前に、右方向に少し動いたのが見えた。
私はすかさず右の方に砲塔を向け、操縦手も右に寄せる。
私は引金を引く。
砲撃の音が響く。
けど、白旗のあがる音が聞こえない。
「外した！」
「はっ！左です！クロエさん、左です！」
みほがそう叫んだ途端、砂煙が晴れ、砂煙に隠れながらも左に寄った戦車が姿を現した。
「ヤバイ！側面が狙われる！」
操縦手が叫び、戦車を急いで左側に寄せようとする。
しかし、敵戦車の装填はもう終わっていたみたいだ。
砲撃音が響く！
ドンッッ!!
私たちの真横からそんな音が聞こえる。
が、砲弾は戦車の湾曲装甲によって弾かれたらしい。
「はは、相手は随分と運が悪かったね」
「そうだね。さっきまで誰かさんが必死な声でヤバイとか言ってのが笑えるね」
「は！何いってんのさ！あんたこそ早く落としなさいよ！」
「後はあんたが合わせるだけだよ、そっちの操縦がフラついてちゃ私は狙えないからね」
「何を～～！」
操縦手の子はそう悔しそうに言い、一瞬のうちに相手の後ろについた。

「ナイッスー！」
「クロエさん！ここら辺は足場が悪いですから注意して下さいね！」
「へいへい、ヘマしませんよ！」
私がそう軽口を叩きながら、狙いを定める。
砲塔はこちらを向いてるから、一撃で仕留めるならもっとしたの部分だ。
戦車の揺れも頭に入れながら、狙いを定めた。
私は引金に指を引っ掛け、引金を引いた。

この後に、何が起こるのかも知らないで

「誰か！誰か！先生呼んできてっ!!」
「大丈夫！大丈夫！しっかりしてよぉ!!!」
「起きて！頼むから起きて!!!」
敵チームだった子の声が響く。
鳴き声に近い。悲しみを含んだ絶叫だ。
「戦車の救急箱持ってきて!!」
「手当をします!!手伝ってください!!」
「クロエ！どうしたのクロエ!!」
なんで、こんな声が響いているのだろう？
なぜ、こんな悲しい声が響いているのだろう？
ああ、そうだ、私だ…
私が、彼女を撃ったんだ……
戦車がいきなり跳ねたんだ、悪路につまづくように、跳ねたんだ。
そしたら、砲口が上にあがっちゃって、キューポラから体を出してた車長に当たったんだ。砲弾が。
そしたらその子が思いっきり叩きつけられて、頭から血を流して気絶して、気絶して、気絶して、本当に気絶？

私は人を殺したんじゃ?あの夢みたいに、私は誰かを殺したんじゃ?
怖い、怖い、怖い!!
違う、私は人殺しなんかじゃない!!
誰も殺したくなんかない!!
私は誰かを殺したりなんかしてない!!
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う、殺してなんか、殺してなんか、殺してなんか!殺してなんかっ!!!
「くぅ…さん」
私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない、私は悪くない!私は悪くないっ!!
「くぅ…ろ…さん」
あの夢の通りになるものか!あんな殺意を!悪意を!向けられはずがない!!いやだ!いやだ!いやだ!いやだ!いやだ!いやだ!いやだ!いやだ!!あんなのはいやだっ!!
「クロエさんっ!!」
「ハッ!?」
「大丈夫ですか?クロエさん?ずっとブツブツと独り言を言っていましたよ?顔色も悪いです。説明は私たちがしておくので、クロエさんは休んだ方がいいのでは?」
「えっ、あっ、大丈夫。多分、大丈夫。説明の方も私が悪いんだから、私が先生に説明するよ」
「本当に大丈夫何ですか?」
「うっ、うん、大丈夫さ」
私は辿々しい口調のまま立ち上がろうとする、けどよろけてしまう。
みほがさっと支えてくれる。
「肩を貸しましょうか?」
「良い、一人で歩けるから」
私はそう言ってみほの手をはねのけ歩き出す。
正直言って吐きそうな程気持ち悪い。

腹の中に変な物が渦巻いて、胃がどうにかなりそうで、頭も真っ白になりそうだ。

けど、誰かの手を借りたくなんかない。

今は、誰の手も借りたくない。

みほも同じ戦車に乗ってた子も私をどう思っているのかわからない。もしかして、私を酷い子だと思っているかもしれない。

否定方な感情を持っているかもしれない。

そう考えるだけで、もう誰とも喋りたくなかった。

この日を境に、私の運命は揺れ動いていくなんて、知るよしもなかった……

電波少女とお見舞い

私は早朝からある人のお見舞いに来ていた。
「金城先輩……」
私が怪我をさせてしまった人だ。
故意ではないし、不幸な事故だとは言え、私がやってしまった事だ。
それを謝らないのは違うし、人としてダメな事だ。
そう思うし、そう思いたい。
それに、どうしても思い出してしまう。
あの悪夢で見た目を。
あんな目を向けられてしまうのか考えると、いてもたってもいられなかった。
どうしても謝らないとという念に駆られ、私はここで待っていた。
「う、う～ん」
「き、金城先輩！気が付きました!?」
「え？クロエさん？」
向こうはこちらを確認した途端ビックリした顔になる。
「え？待って今何時？え？まだ7時半じゃない!?いつからそこにいたのよ!?」
「7時から病院の先生に頼んで入らせて貰って…」
「もう、そんな事しなくてもいいのに…今日も学校あるでしょう？」
「はい、あります」
私の返答を聞いた金城さんが溜め息を吐く。
「もう、そんなに気にしなくていいんですよ。確かに、あれは最悪でしたし、痛かったですし、正直言ってまだちゃんと許せませんけど」
「うっ」
「故意でない事は分かってます、それに私はこんな事もありえると承知して戦車道をしていますから、あなたを執拗に責めるつもりはありません」

「…」
「それに、あなたがこんな朝早くから来て、そんな泣きそうな顔で私を心配してくれているというだけでなんだか怒っているのもバカらしくなりましたよ、私は後輩をこんな事で泣かせる趣味は有りませんから、それに何処にも後遺症の残るような怪我はありませんから、すぐに動けますよ」
「でも、先輩は高校でも活躍する為に追い込みの時期なのにこんな怪我をさせて…私、どう謝ったら」
「そんなに心配しなくていいわよ、3週間の遅れぐらいすぐに取り戻しますよ」
「でも…」
「あー!!もう!くよくよしない!あなたはあなたの心配だけしてればいいの!あなたは将来を期待されてるエースなんだから!」
「でもやっぱり、ウッ、グズッ…」
私はその言葉で堪えていた涙を押さえられなくなって、決壊した。
ボロボロと涙が流れてくる。
「あーもう、泣き出さないの、泣き出したいのはこっちなのになんであなたが泣き出しちゃうのよもう…」
「ごめんなさあい先輩!本当にごめんなさい!私、私、こんな事しちゃって…!」
「もう、ちょっとこっち来なさいな」
そう言って金城先輩は私を抱き寄せ、抱擁してくれる。
「ごめんなさいごめんなさい、優しくされて、涙が出てきちゃって、でも本当に酷い事したのに、悪いことしたのに…」
「そんなに重く捉えなくても良いってば、あなたの金城先輩は全然元気だった、あなたの心配なんて全然杞憂だった。それでいいでしょう?」
私はそんな言葉と金城先輩の温かさで引っ込まそうとしてる涙を止める事ができなかった。
「あーあー、もう、こんなの初めてよ、どうすればいいの?」

金城先輩は困った顔だけをしながらも、私が泣き止むまで私を抱きしめてくれていた。
??

クロエが帰った後、金城は病室の扉を見ながら微笑んでいた。
「だーいぶ、自信家で変な子で、もっとワガママで高飛車な子だと思っていたのにね…」
正直言って、金城の中でクロエの評価は全然高くなかった。
それは今までの生活の中でクロエが付けてきたイメージだ。
「だから、あの子がちゃんと謝まるのももっと難しい事だと思ってたんだけどなぁ～」
金城はクロエは全く謝ってこないか、イヤイヤ謝ってくるかのどちらかだと思っていた。
だからクロエと簡単には和解できないと思っていたし、怒りをクロエにぶつける気満々だった。
グッスリ眠っているクロエを想像して腹わたが煮えくりかえる程には怒っていた。
「それが拍子抜けだわ…まさか泣いて謝ってくるなんて…」
朝早くに病室にいたことも、飼い主に捨てられて泣きそうな子猫みたいな顔をしていたのも、ちゃんと手土産を用意していたのも、みっとも泣く金城の前で泣いて謝っていたことも、全部予想外だった。
「ふふふ、あの子にもあんなところがあるのね」
けど、金城にはそれが少し面白おかしかった。
いつも、飄々としてるクロエにもあんなところがあって、あんな弱々しい姿をすることに。
「なんだか少し、得した気分ね、怪我したのに」
クロエの新しい性格を知れた事が金城には何故か嬉しかった。
あまり関わり合いも少なかったのに、金城はクロエの事を知れて良かったと思っているのだ。
それは、本当のクロエを知る、数少ない一人になれたからなのか

もしれない。
「あの子も、ちゃんと謝れる子だったのね、泣いて謝るのは予想外だけど」
それまでは、微塵もちゃんと謝れる子だとは思っていなかった。
悪いイメージが全てを占めていて、こんなすぐに和解できるなんて考えてもいなかった。
もっと長期戦になると予想していた。
「あの子、ちゃんと頑張れるかな？」
金城はあれだとかなり私の事で引きづりそうだと思った。
クロエを抱きしめてあげた時、かなり震えていたから、純粋に金城はクロエが心配だった。
「まあ、あの子には頼れる仲間がいるし、大丈夫よね」
西住みほや、逸見エリカがクロエの周りにいる。
あの子たちは案外しっかりしてるから、クロエの事はどうにかしてくれるだろうと思う。
「はあ、それよりもあんな事言ったんだから早く怪我治して頑張らないとね、あの子に私は全然大丈夫だってとこ見せて、安心させてあげなくちゃね」
そう言って金城はベットの上で意気込んだ。
「頑張るぞ私ー！・えいえいおー！・」
金城はベットの上で手を振り上げる。
だいぶ元気が出てきたようだ。
「金城さーん、朝ごはんですよー」
「はーい、ありがとうございます」
まだベットの上にいなければいけないが、金城はスッキリした気分だった。
それに戦車道がしたいという気持ちもふつふつと湧いて来ていた。
「私の分まで、頑張りなさいよ、鉄クロエ」
そう言い、爛々と照りつける日差しに目を細めながらも、窓の外へ微笑んだのだった。

今日の空は、澄み切った青空だった。

電波少女と残酷な壁

金城先輩に私のした事を許してもらえた。
そのおかげで私に押しかかっていた何かが軽くなったように思えた。
暗い気持ちで練習をしなくても良さそうだ。
私はそう思いながら練習場に足を運んだ。
??
「あ、クロエさん」
みほが私を見つけるとこちらに駆け寄ってくる。
「どうしたんですか?今朝は食堂にいませんでしたけど?」
「ああ、うん、ごめん、ちょっと用事があったんだ」
「用事…」
「みほが気にする程のことじゃないから心配しなくても良いよ」
「…なら良いんですけど」
なんだがみほに気をつかわせていたみたいだ。そんなに心配かけちゃったかな…
ここは元気だというとこを見せてあげなくちゃ。
「みほ、私は今日も絶好調だから!ちょっと戦車貸して?的のど真ん中、ぶち抜いてあげるから!」
「いいですけど、あまり無理はしないでくださいよ、クロエさん」
「大丈夫だって」
私はそういいながら戦車に乗り込んだ。
戦車は都合よく的を狙える場所にある。
この距離なら私がいつも練習しているのと同じぐらいの距離だ。
外すことはない。
私は照準機に顔を近づける。
距離は近い。レティクルと睨めっこしなくても感で狙える。
角度調整、軸も合ってる。
後は引き金を引くだけ。
私は深呼吸をした。

なんでか分からないけど、手が震える。
汗も酷い。
でも私は世界を経験したんじゃないのか？
何を今更怖気ついているんだ。
もう一度息を深く吸う、吐く。
目を見開く。
しっかりと操縦桿を握りしめる。
リラックスし方がいいんだけど、どうしても力んでしまう。
いや、頭の中でごちゃごちゃ考えるのはやめよう。
集中を高めていく。
…今！
引き金を引いた。
ドンッ！
そんな音が響いたと共に的のど真ん中が撃ち抜かれる。
ふうっ…
自然とそんなため息が溢れでた。
「どう！みほ！私は絶好調でしょ！」
キューポラから体を出しみほにピースする。
みほはちょっと困ったような顔をして答えてくれる。
「クロエさん、絶好調ですね！」

??

「ふーん、で、今からなんの練習？」
「実戦では滅多にありませんけど、１ｏｎ１の練習です」
「タイマンか～」
車長の判断能力、各員の技術力、いろいろなものが鍛えられる練習だ。
「オッケ、じゃあ先準備しとくよ、早速始めるでしょ？」
「はい、すぐに練習に入ります」
「やっぱね～」

私はそう言って戦車の中に入り、砲手用のシートに滑り込む。
次に操縦桿を握りしめた。
手の震えは無くなっていた。
??
覗き窓から流れる景色が見える。
みほは風で髪が乱れるのも気にせずキューポラから上半身を出し、索敵をしている。
戦車は全速力で前進している。
慣れ親しんだ練習場だ。
みほは頭の中に地形図がインプットされている、敵車両がどこにいるのか検討が付いているのだろう。
みほの指示には迷いがない。
おかげで闘いやすくて助かるが。
「そろそろ敵車両と遭遇する位置に入ります、こちらから先手をうちたいので、見つからないように立ち回ります。クロエさん」
「分かってる、外さないよ」
「お願いしますね」
戦車が林に入り、木陰に身を潜めた。
私は照準機に敵車両が映り込めばすぐ撃てるように引き金に指を添えた。
「敵車両発見しました」
その声と共に覗き窓からこちらも敵車両を認識する。
照準機からも敵車両を確認した。
狙いを定め、引き金を引いた。
ドンッ！
戦車砲から放たれた砲弾は敵戦車から右にズレ、地面に着弾した。
「戦車後退してください。方向はバレましたが詳細位置まではバレていないはずです、もう一度相手の不意を付きます」
戦車は木陰の中に身を隠し、突き進んでいく。

初弾を外してしまった。
初弾は私は結構外しやすいのだが、外した次の弾は結構当てられる。
みほもそれを分かっており、カバーしてくれる立ち回りをしている。
次は外さない。
すぐに戦車が次の砲撃ポイントに到着する。
狙いを定め、撃った。
砲弾は次は左に逸れて外れてしまった。
「えっ…」
それは誰の声だったのか分からない。
けど、私はその時声がでない程に驚嘆していた。
私が外してしまったことに、誰よりも私が驚いていた。
なんで？的を狙った時は全然当たったのに、むしろ今日は好調と言ってもいいぐらいなのに、なんで？
「クロエ！何やってんの!?」
装填者の子が私を怒鳴ってくる。
みほは外してしまったことに執着するのではなく、次にどう動くのがベストかということに思考がシフトしていて、私のことは気にせず操縦者の子に指示を出している。
「次は外さないでよ？」
装填者の子が弾を装填しながら言う。
分かってる、次は外さない、外したくない。
焦りが私の思考を支配していく。
冷静さを奪っていく。
戦車は真っ直ぐに走り出す。
これ以上隠れながらの戦闘は無理だと判断したのだろう。
「クロエさん、落ち着いてください、冷静に狙えば当たりますから」
みほが冷静になれと声を掛けてくる。
分かってる、私が狙うんだ、冷静に撃って当たらないはずがない。
思い出せ、日々の練習を、数々の的を撃ち抜いてきたことを、思い

出せ。
戦車が敵戦車に接近する。
敵戦車が砲弾を撃ってきた。
しかし、みほの指示と操縦者の腕のおかげで敵の砲弾を回避する。
すぐに狙いを定め、引き金を引いた。
瞬間、腕が跳ね上がった。
「なっ！」
砲弾は狙いを外れ、地面を穿った。
「クロエ！何してるの！真剣にやりなさいよ！」
「やってるよ！」
装填者の子がまたこちらを叱り付けてくる。
けど、そんなの構ってられない。
今、おかしかった。私の腕がおかしかった。
私の意思に関係なく、腕が跳ね上がった。
まるで別の生き物のように。
腕が私とは別に意識を持っているように。
それがなんなのか、一体原因はなんなのか分からないままだが、撃ち合いは続いている。終わってはくれない。
みほの指示により戦車はさらに敵に接近していく。
ど素人が撃っても当たるぐらいまで接近するつもりなのだろう。
ここで、みほが私の腕に頼らない戦法を取ったことがとても腹ただしかった。
そして、全く当てられない私自身にとんでもなく腹が立った。
「クソッ！」
腕を鉄の壁に思いっきり叩きつけ、操縦桿を乱暴に掴む。
もう私の腕なんて関係ないぐらいに接近するだろうから、後は引き金を引くだけだ。
戦車は敵車両に接近し、攻撃を仕掛ける。
敵の砲撃をフェイントを織り混ぜ回避し、横っ腹をとる。
後は撃つだけ。
戦車が敵戦車の真横を通り砲口が敵戦車の側面を捉えたと同時に、

引き金を引いた。
刹那、私の腕が跳ねた。
さっきと同じだ。私の意思とは全く関係ない、まるで腕だけが私とは別の生物になったような感覚。
「なんで…!?」
私の腕が跳ねたせいで狙いが逸れた。
敵の湾曲装甲に砲弾が弾かれる。
「なっ!クロエあんたっ!!」
装填者の驚いた声が聞こえる。
戦車全体に動揺がはしる。
そして、これを外すのはみほですら予想外だったらしい。
みほの指示出しが遅れた。
そして、相手はそんな隙を見逃してくれるほどお人好しではない。
こちらは完全に後ろをとられ、砲塔の旋回も間に合わず、撃ち抜かれた。
私たちの戦車の白旗が上がる。
私は呆然と自身の腕を見た。
なんで、なんで、思い通りに動いてくれないの…

不意に、私の顔が誰かに掴まれ、横を向かされた。
そして、頬に鋭い痛みが奔った。
「なにしてるのよクロエ!!そんなワザと負けるような試合をして!ふざけてるの!!」
私はただ装填手の子を呆然と見ることしかできない。
「なんとか言いなさいよ!!」
装填手の子がまた手を振り上げる。
こちらをキツく睨むと、その手を振り下ろしてきた。
また、私の頬に熱い痛みが奔る。
それでも何も言えない私に、怒りが収まらないのか、装填手の子がまた手を振り上げた。
「やめてください!」

みほが叫んだ。
装填手の子はみほの方を向く。
「でも、みほ！こいつの操作、とんでもないものだった！いつものクロエからは考えらない程に酷かった！ふざけてるとしか思えないだろ！」
「やめてあげてください、調子が悪い日なんて誰にだってあります。今日はたまたま調子が悪かっただけですよ」
「でも！」
「事情があるんです、クロエさんにも。少なくとも、今のクロエさんを見て悪意を持ってあのようにしたと思いますか？」
装填手の子がこちらを見る。
私は何も考えられない頭でその目を見返すしかない。
「悪意は…ないように見える、けど…こんな状態のヤツに私は一緒の戦車に乗って欲しくない」
みほは何も言えず、少し苦しそうな顔をして、次の言葉を待つ。
「今日はもうクロエは責めない。でも、謝りたくもない。クロエは自身の操縦ミスをまだ誰にも謝ってない、謝れるようにも見えない。こんな状態が続くんなら、他のチームに行かせて貰うから」
そういうと、装填手の子はみほを押し除け戦車を出ていった。
みほはただそれを見送ると、こちらの方へよってくる。
「クロエさん、大丈夫ですか？」
そういって私の顔を除きこむ。
「痛くありませんか？」
私のぶたれた頬を心配しているのだろう。
けど、私はなにも答えられず塞ぎ込むしかない。
「すいません、答えづらいですよね」
みほはそういうと操縦士の子に声を掛けて戦車を倉庫へと誘導していく。みんな、私に気を遣っているのか怒っているのか分からないが何も言わずにみほの指示に従っていた。
私はただ悔しくて悔しくて、無力感の後にふつふつと湧いてきたその感情に、ただ涙を流すことしかできなかった。